

クラシック巡礼 11

ヴェルティの椿姫

サイト掲載: www.i-s-m-kk.co.jp/

2023年 3月29日

別当 勉

<betobetoven@mail2.accsnet.ne.jp>

プロローグ

人間の弱音は、いくら強がって隠しても、死に直面して見事に現れる。私も例外ではない。

ただ、ひとえに魂の昇華を願うかどうかが問題となろう。できれば苦痛なく身も心も綺麗に成仏したい。だが、その最後の想いさえ、人は己以外の親族ほかに委ねてしまうのが常でもある。往々にして、交通事故、戦争、そして天災で即死の場合は、そんな暇もない。

私自身は、思い返せば、いっさいの戦禍に会わずに、昭和～平成～令和と70歳以上ものうのと生きてきた。まだ、いくつも幸せが来ると思っている。仕事で北半球を廻って世界を観てきて、お釣りがくるほどの喜怒哀楽の体験を積んだのに、この世の何に未練を残しているのだろうか。

いや、次第に消えていくデクレッシェンドの臨終が怖いのだ。臆病なのである。男のくせに怯懦極まりない。「死んだ後については、葬式にも墓にもまったく関心がありません」と言っ
て、昨年、急性冠症候群のため80歳で他界した知の巨人：立花隆を見よ。有名な美しいブルックナー・デクレッシェンド、例えば、交響曲第8番第3楽章こそ、彼に贈るべき。自分もそんな風に昇天したいと不遜にも夢想している。それでも、やはり死後の無を、想像するたびに怯えてもいる。私には、あと何かが必要なのだ。

[註] デクレッシェンドとは、クレッシェンド(上昇)の反対語で「下降」を意味する。ベートーヴェンやブラームスは交響曲の終わりを華やかに強大にトッティ(全楽強奏)で締めたが、ブルックナーは反対になだらかに消え入るようにじんわりと終わらせることを得意にした。

[ブルックナー 交響曲第8番ハ短調 第3楽章 ヴァント NDR - YouTube](#)



立花 隆

こんなふうに気が滅入ってしまうようになったのは、私が左腎臓ガンを告知された2020年9月からである。最新の腹腔鏡手術で全摘出を受けた結果は、一応、良好である。まさに奇跡だった。残った右腎臓だけで十分に血液ろ過機能など通常の腎機能を果たし得ている。ただし、身も凍るような転移までは予断できないから、すなわち4ヶ月主治医健診を受けている。以前の健全な状態ではなく、起きてはいない悪魔をかかえているような気持ちである。

そして、いつのまにか、むかし陶酔したマリア・カラスのアリアを聴いてしまった。ヴェルディ作曲の「椿姫」である。主人公の椿姫：ヴィオレッタが歌う

「さらば (アディオ)、過ぎ去りし日々」

には、あらためて痺れてその悲嘆の官能に涙ぼろぼろと震えた。椿姫たるヴィオレッタは、当時の不治の病(肺結核)におかされて臨終を迎え、この世に“アディオ(さよなら)!!”と啜り泣きながら告別するアリアである。何故か、そこに至るまでのシナリオの迫真性が胸に沁み
た。こんなこと、今までなかった。さらに、私の知り合いの若い妻女が、昨年、癌を患って39歳という若さで二人の幼い娘を残して、急逝してしまったことも重なった。彼女は、私の娘と
同い年であるから、余計に我が胸は絞めつけられた。コロナ禍ストレスも相俟って、何もした

くなくなった。もう、『巡礼』なぞと格好つけていられない。実在の女性をモデルとした『椿姫』のヴィオレッタも若かった。己にやってくる死神の足音を感じながら昇天したのである。

私も一步間違えば、そうだったかもしれない。つまり、前立腺肥大症で検査を受けなければ、見つからずにやがてステージⅣの末期に至って、いまごろ手遅れになったはずなのだ。手術前には、ガンという究極の悪魔におののいて風前の灯火となったわが命を想い、確かに過ぎ去った日々の出来事が走馬灯のように思い出されたが。幸か不幸か、黄泉の手前で閻魔様に「帰れ！」と怒鳴られ、苦笑いしてこの世におめおめと戻って来てしまったが、まことにゾッとした奇跡だった。

さて、念願の「椿姫」巡礼をどうしようか、悩んだ。救いとなるものがあるのだろうか。それまでは、『女の仁義』を語るのだと意気込んできたが、とてもじゃないけど腰が引けて及びじゃない。しかしながら、このクラシック巡礼は傷だらけになっても、悲しみに打ち拉がれても、あの懐かしい日々邂逅した名曲と再会して、再びこころの琴線に触れたことを友人、知人に語り、味わいを共有したいと、10年前から念じ続けてきた。それこそが己自身の終止符のついた使命であると誓ったことである。やはり、ヴィオレッタの寒すぎる愁傷を巡礼して再感することで、薄幸の女性へ、せめてもの哀悼を捧げることになるのではないだろうか、観念した。

女の仁義

ところで、『女の仁義』とは何を指すべきなのか。もともと、仁義は、儒教の五常；仁義礼智信という五文字に由来しており、五常の徳性を拡充することで、父子、君臣、夫婦、長幼、朋友の五倫の道を全うすることを説いている。

- ・ 仁 仁義、真実、誠。人を思いやり、優しさをもって接し、己の欲望を抑えて慈悲の心で万人を愛す。人を思いやること。孔子は、仁をもって最高の道徳であるとしており、日常生活から遠いものではないが、一方では容易に到達できぬものとした。
- ・ 義 義理 筋。私利私欲にとらわれず、人としての正しい行い。自分のなすべきことをする、正しい生き方。
- ・ 礼 礼儀。人間社会で、親子、夫婦、君臣などの、社会秩序を円滑に維持するために必要な礼儀。ただし、鄭の子産が説いた『礼』は、天の経、地の義、人の行と宇宙的に三次元に広がる。
- ・ 智 道理に智いこと。
- ・ 信 友情に厚く、言明をたがえないこと、真実を告げること、約束を守ること、誠実であること。

赤穂義士の義士は、禄を授かった親ともいえる君主に対する命懸けの恩義を腹に抱いた侍のことを指す。江戸末期には、渡世人や博徒間の仁義として親分・子分の関係を表現する言葉に使われてきた。それが斬ったはったの修羅場をとまなう芝居で使われてきたことから、一般人の社会活動では忌み嫌われてきたのだけれども、非常に有名になった言葉である。いろんな場面で多用されてきているが、真に解されて使われているケースはあまり見かけない。

情にもろい女性の場合には、当てはまる場面は多くないのだが。プッチーニの歌劇「トスカ」を聴いて観て、気付いた。女にも凄まじい怨念と憤怒にまみれた修羅場があるのだと。それは、恋愛という感情的なものではなく、互いの思いやりに育まれて堅い絆となったものであって、そこには親でも割り込めない強靱な結界が張られている。

仏教の教えの中に、人の心の状態には、餓鬼道、畜生道、修羅道、地獄道、天道、人間道という六道について触れられている。餓鬼とは餓えた鬼のことで、昔はお腹を四六時中、空かした子供自体がそう呼ばれ、畜生は尻尾のついた犬猫ほかを指し、餌をくれる者には誰にでもなつき、主人をさておいて信義に悖る行為に走っても何も感じない。それとは真逆に信義を貫いた犬がハチ公であった。残念ながら、猫にはそういった美談が無い。代わりに怨恨に満ちた化け猫の話は巷にあふれている。

修羅とは、怒り狂って我を忘れた状態をいうらしい。地獄は、堕ちて痛みと苦しみに七転八倒して暴れまわり藁をもすがる精神状態をいうのだそうだ。天道とは、私なりの解釈が許されるなら、欲望に満たされて心身ともにのぼせた状態をいうのだろう。落ち着いて理性が豊かな状態が究極の「人間道」であると思うのが覚えやすい。

つまり、椿姫たるヴィオレッタは道を踏み外した女として「ラ・トラヴィアータ」と言われ、すなわち渡世人を極道というようにその類の女と呼ばれたのであろう。品のない意味合いの汚れた言葉で表現されている。早い話が、売春婦という日本語に直訳されてもよいことばにちがいない。しかも、超高級コールガールであり、江戸時代の花街では「花魁」という言葉に該当す

るともいえる。オペラになる前の原作の戯曲では『椿姫』とされていたが、ヴェルディは敢えてラ・トラヴィアータと名付けた。悲劇の極端性を狙ったのかもしれない。主人公が別嬪でも薄幸であったので、人情的にも人々は美しい草花の名を付けたかった。椿の花（カメリア）が好きでいつも周りに飾っていたから椿姫と皆は呼んだ。私もその方が耳当たりがよい。

ヴィオレッタは絶世の美女でもあったから、悲劇が起きて、結果、絵にかいたような悲しいドラマに仕立て上げられてしまう。過ぎたるは及ばざるが如し、である。美しすぎることは、ありきたりの幸福という名の船から飛び出して、人間の惨たらしい小説の創作に意欲を燃やす作家すなわち鮫の餌食になってしまうのだ。

でも、ヴィオレッタは、そんな非業な運命のベルトコンベイヤーに乗っていることを呪いつつ、女としての良心と贖罪に覚醒して、肺結核で死に直面して悶えながらも、泣きじゃくりながらも最後に人間道の務めを果たすのである。

蓋し、その死に様こそ彼女の仁義といえよう。

六道とは・コトバンク (kotobank.jp)

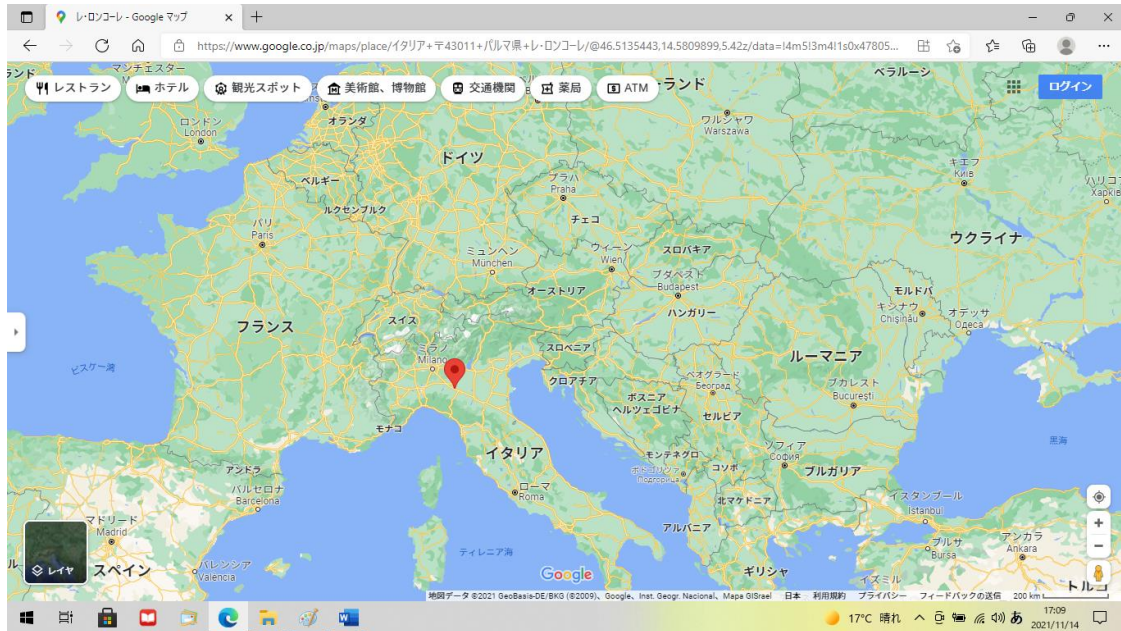
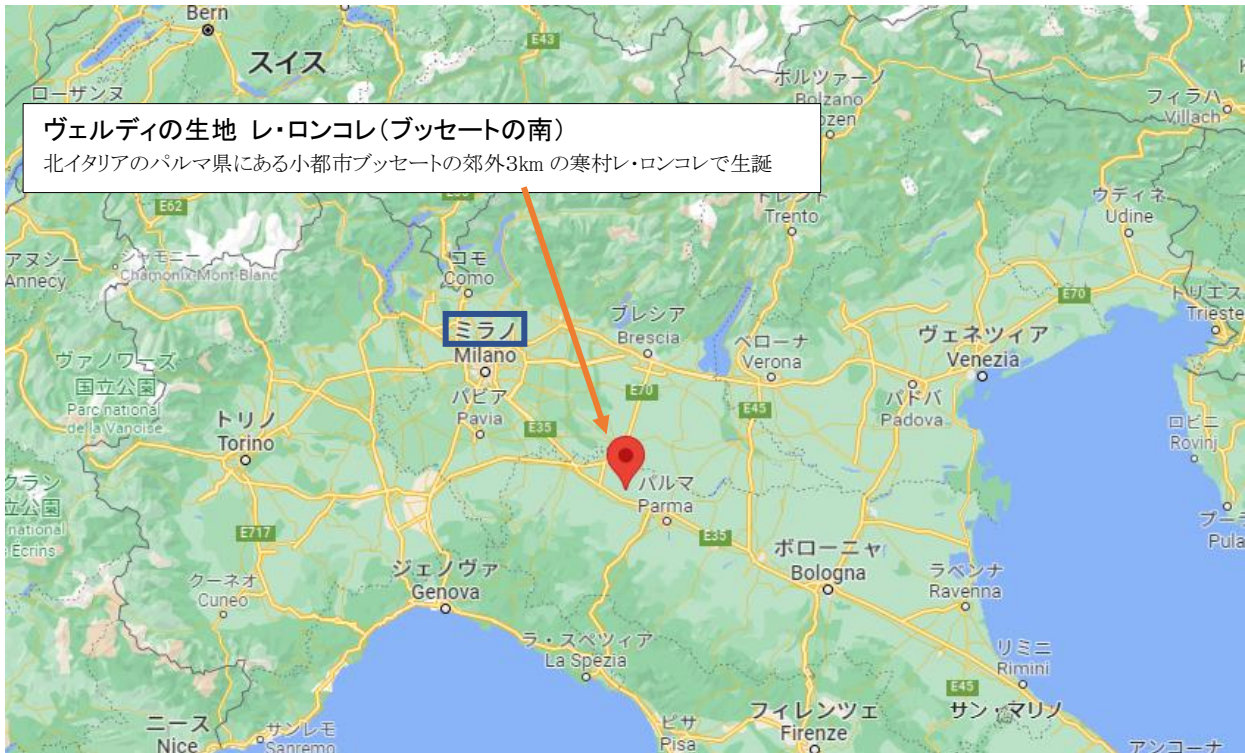
仏教の輪廻思想において、衆生（しゅじょう：民衆）がその業に従って死後に赴くべき六つの世界。地獄道、餓鬼道、畜生道、阿修羅道、人間道、天道をいい、六趣ともいう。人・天の二道は善趣、他の四道は悪趣とされる。仏典では修羅（阿修羅）をあげず五道とするのが一般的であるが、日本では六道輪廻の語が定着している。六観音、六地蔵は、観音菩薩や地蔵菩薩が六道のそれぞれに姿を現し、迷える衆生を済度するという思想を象徴したものである。

ヴェルディとは

イタリアの作曲家でいわゆるロマン派に属し、オペラ作曲に専念した音楽家である。が、彼は、特段の音楽理論的な世界に深入りしなかった。バッハやベートーヴェンのように、楽曲の形式とか、構成に興味を示さなかった。ゆえに、最強のライバルであるワーグナーの楽劇論などにも拘らない、少し方向が違った不思議な楽才であった。当時のイタリア本場のエンターテインメントであるオペラに深く染まったからかもしれない。

ただひたすらに、娯楽の歌劇に身を捧げたのだ。いまや、舞台興業では、ミュージカル、宝塚歌劇、歌舞伎など賑やかに幅広く流行っているが、17世紀来の歌劇は、管弦楽団、独奏歌手と合唱団などによる至高の絢爛豪華な総合音楽美において、スケールも深さも飛び抜けて比ぶべくもない。なにしろ、管弦楽団、歌手、合唱団、衣装係ほか、数百人が携わって出来上がる舞台である。もとはといえば、19世紀ロマン派の名だたる文学士たちが書いた脚本ゆえ、それを超えるものなぞ考えるだけでも寒気がする。しかも、題材は紀元前のギリシャ悲劇から16世紀のシェイクスピア戯曲まで波及している。そんな世界に魅せられたヴェルディであったことは看過できない。だから、彼の伝記は、彼の二十六の歌劇をぜんぶ聴けたなら、書けることになるであろう。伝記は探したが、音楽之友社のおさなりの出版物以外、本当に無い。

ジュゼッペ・ヴェルディは、北イタリアのパルマ県にある小都市ブッセートの郊外3kmの寒村レ・ロンコレで1813年に生まれて1901年に88歳で大往生した。この1813年という年は、なんとリヒャルト・ワーグナーの生誕年でもあるのだが、1800年代は、クラシックの名だたる作曲家が百花繚乱のごとく現れた時代である。趣味で19世紀の彼らの音楽を鑑賞するにも、ましておや、伝記を書きながら巡礼するにも半端な覚悟では無理だ。まわりきれない、誰もあきらめてしまう。



師匠

ヴェルディに特別に影響した師匠はいない。また、親友ともいえる同時代の音楽家も見当たらない。音楽に異常な興味を示した幼いヴェルディに父親が中古のスピネットを買え与えたところ、その演奏に没頭して楽器を壊してしまうほどだった。というくらいの群を抜いた才能を持っていた。

おかげで、教会のオルガン引きのアルバイトをしたり、10歳頃には田舎の先生レベルの音楽学と演奏技術を身に着けていたという。

やがて、少し有名な先生のもとで修業に励んだが、なんと先生の娘に懸想して、できちゃった婚までしてしまったという。しかしながら、若き日の多感な時代に、妻と子に死に分かれた。凄まじい人生の悲哀を浴びたのだ。このことは、少なからず『椿姫』の作曲に響いたといわれている。生涯作曲歌劇：26曲もある中で、『椿姫』はプリマドンナ・ソプラノが主役になるたった一つのオペラだったのだ。

大作曲家の中では、その天を突き抜ける才能が他の音楽家と違って、彼が、オペラの聖地ミラノの近くで生まれ育ったという特典は見逃しがたい。モーツァルトが同時代にいたら、垂涎の羨ましさに溜息をついたであろう。ベートーヴェンもそうだったように、彼らという天才たちにはもう師匠は必要なかったと言えるのかもしれない。ベートーヴェンは遥かな音楽の都：ウィーンまで進出したが、ヴェルディにはオペラの聖地ミラノ・スカラ座が近くにあって、遠征修行が不要だったことは、決定的に幸いした。

*****[ヴェルディ：生涯と作品 \(cocan.jp\)](http://cocan.jp)*****

ヴェルディは1813年10月10日、北イタリアのパルマ県にある小都市ブッセートの郊外3kmの寒村レ・ロンコレで、行商人相手の飲食店兼宿屋1)の長男として生まれた。レ・ロンコレは人家わずか数十戸の鍛冶を主とする小さな村であったが、古くからクレモナからパルマへ抜ける行商人や旅音楽師たちの交通の要衝であった。この時、まだイタリアは国家統一前で、7つの小さな王国に分かれていた。レ・ロンコレの地域はパルマ公国に属し、ナポレオン一世のフランス第一帝政(1808-14)の支配下にあった。フランス領であったが、この年ナポレオンはロシアで敗北し、イタリア人もフランス軍として加わった。約2万7千のイタリア人もロシアに行き、帰って来たのはほんのわずかだった(他国を含めて全体で2千人弱だった)という。ヴェルディが生まれた丁度10月10日は、ライプツィヒ諸国戦争が始まる日でもあった。だが、ナポレオン支配も終焉を迎えようとしていた。戦争は続き、たった一軒の飲食店兼宿屋しかない小さな寒村にも、ヴェルディが一歳になった1814年にオーストリア・ロシア軍がここまでやって来た。寒村であっても重要な交通の要衝であったからである。盗み、略奪、暴行が横行した。しばしば母はヴェルディを連れて近くの洗礼を受けたサン・ミケーレ教会の鐘楼に隠れたという。

旅音楽師：バガセット

ヴェルディ家が営む家業の宿屋という環境の中で育ったヴェルディは、立寄った旅音楽師の音楽を胎内にいた時から耳にしていたことだろう。そうした旅音楽師の一人でヴェルディの家を常宿にしていたバガセットが、幼いヴェルディの素養を見抜いて、父に彼が音楽家の道を進むよう勧めたといわれている。後年ヴェルディが、老音楽師を捜し求めて報いたというエピソードも伝えられている。彼の一生を支配した人物であったといえるかもしれない。

バイストロッキ

1821年7才の時、ヴェルディは村のサン・ミケーレ教会オルガニスト、バイストロッキに本格的な音楽の手ほどきを受けた。ヴェルディはただならぬ熱意ぶりだった。ついに両親は、ひどい中古のがたがた状態のスピネットをヴェルディに買い与えた。寝食を忘れて彼は弾き続けたという。またこの時彼の故郷はフランス領だったこともあり、小学校ではまだフランス語が使われていた。ヴェルディのイタリア語とフランス語のバイリンガルであったのはこのためである。

バレツィ

10才の時、バイストロッキが死に、父は知人でもあるブッセートの雑貨と酒の卸商人バレツィ(1787-67)に相談した。小学校を終えた息子の行く末を考えてのことであった。音楽愛好家であるバレツィはヴェルディの能力を見抜き、ブッセートで勉強するよう勧めた。バレツィはこの町の名望家で(後にヴェルディの義父になる)、ヴェルディの恩人としての役割を死ぬまで果たことになる。ヴェルディ・オペラには特有の役廻しや性格をもつヴェルディ・バリトンが登場するが、その存在の根源がこのバレツィであると思われる。

そうしてヴェルディは靴職人プニャッタの家の下宿してブッセートの中学校に通うようになる。下宿代の半額を稼ぐために生家のあるレ・ロンコレに通ってサン・ミケーレ教会のオルガニストを務めた。

1825年13歳の時からバレッツィは、ヴェルディにブッセート市立音楽院院長でありブッセート大聖堂楽長（合唱長・オルガニスト）であるすぐれた音楽家であったプロヴェーシ（1770-1833）に指導を受けさせた。1826年から最初の作品を書き始め、ブッセートの楽友協会のメンバーが集まるバレッツィ家に頻繁に通い始めた。ここでやっと本物のピアノに触れることができ、一日中入り浸るようになった。この厚遇に報いるためにバレッツィの商いの手伝い、つまり会計を手伝うことになる。帳簿を付けたり、請求書の発送もした。またバレッツィ家の長女**マルゲリータ・バレッツィ**（1814-40）に歌とピアノを教えた。ヴェルディより一つ若い彼女はやさしくおとなしい内気な娘で、彼に惹かれていき、彼も同様であった。



1831年、ブッセートでは強盗が頻繁に起こり、バレッツィの妻はヴェルディにバレッツィの家に部屋の提供を申し出たので、プニャッタの所から引っ越した。ヴェルディの音楽の勉強も好調に進み、またますますバレッツィの信望も得ていく。そしてバレッツィは**ミラノ音楽院**入学のために、奨学金の申請や手続きを取り計った。次の年の1832年に奨学金は認可され、マルゲリータに思いを残し、いや彼女の思いの方がはるかに強かったが、6月22日にミラノに着いた。しかし、ミラノ音楽院の入学試験は**不合格**となる。入学の定員はわずかだし、年齢制限は超えているし（14才以下が入学資格、彼は18歳だった）、特別な資質も見出されなかったとされている。不合格は年令のためであったと伝えられているが、実際はピアノの演奏能力や対位法においても力不足でもあったようであるが。

ラヴィーニャ

その後、**ミラノ**に移ったヴェルディは、1832年、**ヴィンチェンツォ・ラヴィーニャ**（1766-1836）の所へ個人レッスンに通い始め、作曲家としての本格的な教育を受けることになった。ラヴィーニャは有名なオペラ作曲家で、オペラ・セリアやオペラ・ブッファなどの実績を以前はミラノ音楽院のソルフェージュの教師と、スカラ座の歌手の指導者とチェンバロ奏者（チェンバロのマエストロ）といわれる）を務めていた。特にヴェルディに**対位法**をしっかりと教え込んだ。**明けても暮れてもカノンとフーガばかりだった**とか。パイジェッロ（1740-1816）の礼賛者のラヴィーニャから得るものが無かったとされているが、後期になって書く「弦楽四重奏曲ホ短調」、「聖歌四編」や「ファルスタッフ」などにおいて大いにその成果が発揮されることになる。ヴェルディは、何度かは**スカラ座**に通った。しかし、スカラ座で上演されるプログラムは、ドニゼッティ（1797-1848）とメルカダント（1795-1870）のオペラが多く、彼が聴きたかった**ベ**

ルリーニ (1801-35) はほとんど無く、**ロッシーニ** (1792-1868) も少し、外国のオペラは皆無だったという。

なお、ミラノでは、ハイドンのオラトリオ「天地創造」の指揮者が病気で倒れたので、そのリハーサル代番として起用された。ところが、ジュゼッペの指揮能力が期待以上に発揮されたので、1834年：21歳で、本番公演での指揮者に抜擢され、見事に成功させた。このあたりから、ジュゼッペはオペラの作曲に傾倒しはじめた。

そうして、かねてより愛し合っていたバレッツィの長女

マルゲリータとヴェルディ:23歳は、1836年に結婚届を

ブッセートの役所に出す。そのすぐ後に質素な結婚式が行われた。ヴェルディはその年2月にブッセートの聖バルトロメオ大聖堂楽長と市の音楽教師に任命されていて、いよいよブッセートに居を構えることができた。しかし、ヴェルディの給料はわずかなので義父バレッツィから援助を受けた。ヴェルディの市の音楽教師の仕事も始まり、週に5日間、チェンバロ、ピアノ、オルガン、歌唱、対位法、作曲法を教えた。9月にバレッツィに借金して学校の休暇を利用して60日間だけミラノへ行く。1838年7月長男を得たが、長女ヴィルジニャ・マリア・ルイジアは1年4ヶ月で失った。彼はブッセートでの仕事を辞職することにした。

1839年2月6日(26歳)に妻と長男を伴い、**ミラノ**へ移住した。しかし長男が1年2ヶ月で病魔に奪われてしまう。

ミラノ スカラ座



スカラ座 デビュー

1839年11月にスカラ座で初めてのオペラ「サン・ボニファッチョの伯爵オベルト」を初演し、おごなりの評価を受けた。1840年(27歳)スカラ座から新作の委嘱を受けたが、作曲を始めて数週間して貧しさの苦労のうち、**最愛の妻マルゲリータを1840年6月に失った。**悲嘆の中でも作曲を続け、9月にオペラ・ブッフア「一日だけの王様」の初演を迎えたが、惨憺

たる失敗と不評を味わった。1841年のある日、ミラノで人生どん底の極貧状態でしかも孤独な生活をしていたヴェルディに、スカラ座劇場支配人**バルトロメオ・メッツリ**が、一つの台本「ナブッコ」をヴェルディの外套のポケットに押し込んだといわれている。この時、やがて再婚する**ジュゼッピーナ**を伴っていたとも伝えられているが。

ナブッコ

「ナブッコ」(1842年初演、旧約聖書を素材にしている)は、オーストリアの支配下にあったミラノの人々を沸かせ、文字通りの**大成功**を収めた。これによって本格的なオペラ作曲家としての名声を得る第一歩となった。オーストリア検閲当局はこのオペラを、革命を扇動する危険な作品とし、いくつかの場면을削除させようとしたが、ヴェルディは断固として拒否したのであった。

他の都市での活躍

ヴェネツィアのフェニーチェ劇場の依頼で第5作「エルナーニ」を完成し、初演する（1844年）。このユゴーの原作はパリでも賛否両論を引き起したロマン主義戯曲であった。これはユゴー芸術と最初の結びつきであり、ヴェルディの新しい劇的表現の開拓になる。それ以前のオペラには見られなかったドラマとしての有機的な統一を計り、音楽をドラマの内容と密接に結びつけようとするようになった。それまでは、一つ一つの歌が、感情の凝集となって爆発するというようなやり方であった。以後、ローマでは「二人のフォスカリ」（1844年11月3日アルジェンティーナ劇場初演）、ミラノ、ヴェネツィア、ナポリのために相次いで書かれたが、それ以上の新しい発展はなく、自身“苦役の年月”と呼んでいた。リューマチの発作と胃の痛みにも悩まされる。

第10作「**マクベス**」（1847年フィレンツェ、ベルゴラ劇場初演）で、初めてシェークスピア（1564-1616）に挑戦する。シェイクスピアは彼の深く尊敬する作家で、「リア王」、「テンペスト」、「ハムレット」についても晩年までオペラ化する望みをもっていた。「マクベス」においてより人間の深層心理の表現に、彼の音楽が向った点は注目すべきである。マクベスとその夫人の異常な人物像は、従来のオペラに現れる典型的な人物像ではない。この人物に劇的で性格的な新しい表現法を見出した。これはモンテヴェルディ以後200年間、イタリア・オペラが忘れていたものであったといえよう。「群盗」（1847年ロンドン、クイーン劇場初演）以後、1年少しパリにとどまった（1847年冬-48年12月20日）。この時、パリ、オペラ座から要請で旧作「十字軍のロンバルディア人」（1843年ミラノ初演）を改作した。題名も「エルサレム」（1847年11月26日パリ初演）となり、フランス・オペラ、しかもグランド・オペラとしてリメイクして大成功を収めた事は意義深い。

こうした1847年に引退してパリで生活していた**ジュゼッピーナと再会**している。そして二人に愛が育まれていく。彼女は2年以上前からパリに住み、声楽を教えたり、演奏会も行っていた。プログラムの曲の殆どがヴェルディのオペラのアリアだったという。二人はパリで愛を確かなものとし、ヴェルディは二度目の人生の伴侶をジュゼッピーナ・ストレッポーニと決めたようだ。ヴェルディが幸せなパリ滞在時に、2月革命（1848年2月22-24日）が起こり、国王ルイ・フィリップ



ジュゼッピーナ・ストレッポーニ

（在位1830-48年）は退位させられイギリスに追放される。3月13日にはオーストリア首相メッテルニヒが辞任し、イタリアのリソルジメント運動家たちは浮き立つ。

ヴェルディは4月5日-5月31日の間にミラノからブッセートへ行って家を買ひ、サンターガタにも農地と大きな別荘を買取った。2月革命後、イタリアでもイタリア統一をめざすリソルジメント運動などヨーロッパ中が動いた。こうした中ジュゼッピーナと共にパリ郊外パシーへ居を移して、落ち着いた生活を送る。時々劇場にも出かけ新しいオペラを観た。彼にとって**ワーグナー**はまだ目の中に無かった。フランスで活躍するマイヤベーア（ドイツ1791-1864）には注目し、批判も感じていた。新しい世界へと眼差しを向け始めている。この頃バイロン原

作による「海賊」を作曲した。これは2年前に興味を引かれたものの、放ってあったものだった。1848年2月12日完成した。10月25日トリエステのグランデ劇場で初演だったが、完全な失敗に終わった。

パリ滞在（1847年冬-48年12月20日）後、ヴェルディとジュゼッピーナの二人は連れだつてイタリアに帰り、ブッセートに住んだ。閉鎖的なブッセートの口さがない連中にはこの二人の婚姻を伴わない同棲生活は受入れられないもので、人々のうわさの種になった。ジュゼッピーナにとっては大きな苦しみとなる。後に広大な土地を購入してあったサンターガタに移った。

中期の名作

前期でのさまざまな経験と蓄積と試行錯誤を総決算し、その中から新しい発展の道を模索した力作として現れたのは、中期（1851-69）からだった。それは

「リゴレット」、
「イル・トロヴァトーレ」、
「ラ・トラヴィアータ(椿姫)」

から始まる。これらの3作は「マクベス」に見られた異常な性格の激烈な表出をさらに進め、異形の中の真実を追求したものであった。いずれもオペラとしては全く新しい題材であり、ともにその中に人間的な真実をもつ音楽を作り出そうという姿勢に貫かれている。そして音楽を声の技巧のためではなく、劇展開に一致し効果をもたらす音楽を考えた。そうしたヴェルディの意図が徹底するにつれ、彼の音楽はますます劇的表現に満ちたものなり、管弦楽の担う役割も増していく。従来の声の分類による定型とその役割の概念も打破されていく。

その後フランス・オペラ「シチリアの晩鐘」（1855年パリ初演：フランス語版）と失敗作と言われる「シモン・ボッカネグラ」（1857年初演）を経て3つの力作を生むことになる。それは

「仮面舞踏会」（1859年初演）、
「運命の力」（1862年初演）、
「ドン・カルロス」（1867年初演）

である。特に「仮面舞踏会」は、イタリア統一と独立（=イタリア国家統一運動 Risorgimento）を目指そうとオーストリアに宣戦布告をしようとしている時期でもあり、このオペラはイタリア人の希望の星としての役割を果たした。音楽的な観点で捉えてもこれほど新しい書法と形式への意欲を示した作品は、それまでの彼のオペラには無かった。意識的に旋律を否定的に扱い、声楽と管弦楽を結合する厳格さを求め、それはより簡潔さの中で音を造形するというものだった。また旋律や音型に示導動機 Leitmotiv への近づきがみられ、ヴァーグナーの音楽論に決して無関心ではなかったことが示されてもいる。

再婚

1859年8月29日にヴェルディ（46歳）とジュゼッピーナ（44歳）はやっと正式に結婚式を挙げた。10年におよぶ長い同棲生活に終止符を打ったのである。1861年にトリノに召集された国会の下院議員に選ばれ、この議会はついに待望のイタリア王国の成立を宣言した。最初の妻の父であり援護者のバレツィは1867年に死去、またコンビの台本作者ピアージェも世を去った。1968年にロッシーニ Rossini イタリア（1792-1868）がパリで亡くなった。この時ヴェルディは、イタリアの14人の作曲家との共作でレクイエムの作曲を計画し、ヴェルディは「リベラ・メ」を作曲した。結局この計画は13人によって仕上げられたが（1869年9月全曲完成）、その時上演は実現しなかった。実現するのはなんと1988年ドイツにおいてであった。

1873年5月22日、88歳の文豪マンゾーニの死に際してヴェルディは

「レクイエム」（1874年作曲、初演）

を作曲した。これは三大レクイエム、モーツァルト、フォーレ、ヴェルディのそれにおける最高

傑作と言ってもよいだろう。まず、祈りの情感が激しくともいたわり深く、群を抜く。次に、ほぼ完璧なミサ曲の構成を採用しているから、モーツァルトのように、変な疑問を持たないで済む。フォーレの場合は、レクイエムの山場ともなる「ラクリモーザ」がフォーレ自身により省かれている。ほかは申し分ないのに、残念だ。

モーツァルトについては、未完成で前半までしか彼の筆に拠っていない。後半はジュスマイヤールという三流弟子によって書き継がれているから、誰もモーツァルト直筆の前半しか聴かない。臨終で絶筆となった『ラクリモーザ』はこの世のものとは思えないほどの絶品であり、これだけでクラシック・ファンは、痺れて胸が破裂するほど満たされてしまう。名曲中の不思議な傑作である。

*****[ヴェルディ：生涯と作品 \(cocan.jp\)](http://cocan.jp)*****

オペラ『椿姫 "LA TRAVIATA"』について

<原作とそのモデルについて>

この物語は「三銃士」や「モンテ・クリスト伯」で有名なアレクサンドル・デュマ・ペールの息子、アレクサンドル・デュマ・フィスの作品であった。フィスの恋人、高級娼婦のマリー・デュプレシとの実話を元に創作された。

父親のデュマは作家を志望し、単身田舎から出て来て成功をつかんだ、豪快で魅力的な男性だった。しかし、遊び人的と言えなくはないところもあり、まだ貧乏だった頃に同郷の女性と生活上の都合から同棲し、息子のアレクサンドル（父と同じ名前、父をペール、息子をフィスと呼んでいた。）が生まれた。

父デュマは作家として成功した後は、たくさんの女優などに関係、または結婚したが、ついにアレクサンドルの母親のカトリーヌとは結婚しなかった。後に認知はしたが、アレクサンドルはフィス（いわゆる私生児）であった。社会的な枠が厳然としてあった当時の社会では白い目で見られ、アレクサンドルは父親を敬いながらも、自分が私生児である事に悩み、父親に群がる女優などの派手な女性たちを嫌い、自分自身は道徳的な人物であろうと努力した。

そんなアレクサンドルであったが、父を見習って作家になろうと思いつつも思うようにはいかずに悶々としていた頃に、当時の裏社交界で一際目立つ存在であったクルチザンヌ（高級娼婦）のマリー・デュプレシ（本名アルフォンジーヌ・プレシ）に一目惚れしてしまった。そこから堅気ではない女性たちに対しても理解を示すようになり、それどころか、私生児として差別される自分と同じように差別されていた者に深く同情を寄せるようにもなった。そしてマリーとのいきさつを元に、悔い改めた高級娼婦を主人公として書いたのが、この「**椿姫**」なのである。

椿姫にまつわる舞台劇作品

椿姫	小説	アレクサンドル・デュマ・フィス／作	(1848年)
ラ・トラヴィアータ(椿姫)	オペラ	ジュゼッペ・ヴェルディ／作曲	(1853年)
アルマンとマルグリット	バレエ	フレデリック・アシュトン／作	(1963年)
椿姫	バレエ	ジョン・ノイマイヤー／作	(1978年)

歌劇「椿姫」の誕生

作曲 ジュゼッペ・ヴェルディ

初演 於 ヴェネチア・フェニーチェ歌劇場 1853年3月6日

小説「椿姫」が評判になってすぐに「椿姫」（原題は“La Dame aus Camelias”という。）を戯曲化して上演する話が持ち上がった。この「椿姫」という日本語訳は森鷗外がつけたものと言われている。アレクサンドルは自ら戯曲を書き上げたが、テーマが不道德だと言う事で、政府からはなかなか許可がおりなかった。やっと上演できたのは、ルイ・ナポレオンがクーデターを起こして政治体制が変わった1852年2月2日の事であった。

その観客席にはすでにオペラ作曲家として名をなしていたヴェルディがいたのである。さるソプラノ歌手との許されぬ愛に悩んでいたヴェルディは感動し、題名を「**ラ・トラヴィアータ（道を踏み外した女）**」として、オペラを書き上げた。

変わったのは題名だけでなく、登場人物の名前もオペラ独自のものとなっている。

実話	小説：椿姫	オペラ：トラヴィアータ
高級娼婦：マリー・デュプレシ	椿姫：マルグリット・ゴーチエ	椿姫：ヴィオレッタ・ヴァレリー
アレクサンドル・デュマ・フィス	アルマン・デュヴァール	アルフレード・ジェルモン
	父親デュヴァール氏	ジョルジョ・ジェルモン
	マルグリットの友人の娼婦	フローラ
	マルグリットのパトロン	ドゥフォーール男爵
	マルグリットの召使	ナニーヌ

初演は失敗であったと伝えられている。失敗の原因としては、歌手たちと役柄の声域がうまくマッチしていなかった、とか、主役のヴィオレッタを歌ったソプラノ歌手が太りすぎていて、肺を病んで死んでいく薄幸の美女にはとても見えずに滑稽だった、などいろいろな事が言われた。ヴェルディも「私の音楽が悪いのか、歌手が悪いのか」と悩んだそうだが、今では名作オペラとして世界中で上演されてきていることから、不評の原因は「ヴィオレッタを歌った歌手の太りすぎ説」が有力だが、一流歌手ほど太るという業界の常識があるので仕方がない。何しろ初演の1853年にはヴィオレッタのモデル、マリー・デュプレシを知っている人がまだ何人もいたのだが。

考えてもみてほしい。ほとんどの名歌手は、拡声器が要らないほど、歌劇場を揺るがす大音声、広い音声オクターブを鍛錬するための腹式呼吸に拘るため健康過ぎて、消化機能が人並みはずれており、今も昔も小錦のように豊満体である。だから、椿姫ではスタイルに拘る限り、二流ソプラノでもスリムな歌手の採用でプロデューサーは諦めるしかない。

それにしても、わざわざサナダムシの卵を飲んで腸内で飼いながら、何年も摂食してヴィオレッタを演じたマリア・カラスのプロ根性には頭が下がる。

物語はラストが小説とは違い、まだヴィオレッタの息のあるうちに彼氏アルフレードが帰って来て二人は愛を確かめあう。また、父親のジェルモンもヴィオレッタに別れを迫った事を後悔し、謝罪に訪れる。そしてヴィオレッタは二人と忠実な召使に囲まれ、息を引き取る。



1958年、ロンドンのロイヤル・オペラ・ハウスで公演された『椿姫』でのカラス(35歳)

諦めきれない椿姫

私には観念できない。このまま、時間が止まった真っ暗なあの世に逝くなんて、それが生きとし生けるものの宿命であってもまっぴらだ。だからと言って、江戸時代初期の隠れキリシタンのように、踏み絵で捕まって十字架に架けられて、地獄の苦痛が伴う火炙りにされることなく、さらにとんでもない。結果として、親鸞の浄土真宗の教えにあるような極楽浄土を夢見ているほうが妥当なところであろうが、そんな甘い最後は滅多にない。

ちなみに一向念仏宗徒は死後の浄土を信じて、信長の何万もの大軍団と肉弾で1年以上も闘った。死を恐れない長嶋一向一揆宗徒や石山本願寺一向宗徒の凄まじさは戦国時代の歴史に刻まれたのだ。自殺が禁じられているキリスト教徒には、死を賭した日本人の狂気の闘争本性が解らないらしい。ついこの間の太平洋戦争末期における特攻隊でも米海軍を寒からしめたほどなのに。だからとも言えようか、戦後の日本には再軍備させないこと、すなわち、日米同盟で軍備を必要としないように計らうことが必須とペンタゴン：米国防総省は腹を括っており、代々、幹部間で引き継いできているようだ。

中国共産党は、侵略戦争で自虐たる心根をもった戦後の日本からは、1980年代に東洋一の製鉄工場(参考「大地の子」)を造ってもらった。

中国共産党と米国については、1970年頃、第二次大戦の戦勝国である中華民国(台湾)を押しつけてもらって常任理事国として国連加盟できたのに。これにより、単独では永遠にありえない優遇で国際社会のてっぺんに躍り出たことなど、米国への恩義を忘却して、米国の数多の特許や著作権を侵害した。それらが無許可・無償で使い込んでのしあがったファーウェイが捕まったことなど反省すら顔にも出ない。そして、我こそは世界のリーダーなのだと言った増長した開発途上国レベルのみすぼらしさは、まさにアフリカの土人国家なみである。あげくは、米の市場がオープンであることに付け込んで、多くの若手IT技術者(海亀と呼ばれている。)を送り込んでノウハウをパクってきて己が国のIT市場の充実に注ぎ込んだ。中国人の血統的才能は当然とうそぶき、わが民族の技能の高さにのぼせる。そして、いまや経済的にも増長し、かりそめの成金王者感覚にどっぷり漬かって、弱小のアジア、アフリカ諸国に見た目は美味しそうだが非借款に誘い、スリランカのように借金返済地獄に落とし込んでにんまり。あげくは、米国や日本のおかげで経済大国になって溜まった資金を軍備に注ぎ込んで、軍事大国をひけらかして脅ししかない能無し外交で先進国になったつもり。いまだに、ノーベル賞受賞者が一人も出ていないという民族的低能レベルの現実に恥ずかしさも覚えない。そんなみすぼらしい張子の虎ごとき大国もあることは我々は見過ごせまい。

もどって、やはり、鎌倉時代、北陸から越後をまわり関東一円の民衆の気持ちを集約して積分した親鸞は凄い。その中興の弟子たる蓮如から顕如と、時代はくだっても、その宗旨力にさ

すがな信長も舌を巻いた。そして、石山本願寺との数年間の死闘を終わらせるため、当時の天皇に調停を申請したほど。

キリスト教は、形而上学的な福音書による教義に拠って厳しすぎたから、学のない土着の民衆に沁みなかった。それに比べると、18世紀にカンタータ200曲以上も書いて演奏し、キリスト教義をドイツのプロテスタントの民衆に普及・浸透させたJ.S. バッハの功績は計り知れない。

歌劇「椿姫」については、思い返せば、私が30代半ばで遮二無二、オペラを聴きたい意欲に駆られたのが始まりである。私は、最もポピュラーな『椿姫』と『トスカ』に取り付いた。レーザー・ビデオ・ディスクが市場に現れた1980年代である。ビデオなら、画面にアリアやレチタティーヴォなど、日本語訳の歌詞字幕が出るからストーリーが追えて鑑賞しやすいのだ。

しかし、余りにも薄幸な遊女の物語である。運命というか、純真で健康的な逞しい青年：アルフレードに出会い、一筋に惚れられてしまった。最初は、いつもの熱烈ファンのストーカーのように迷惑に感じたが、次第に彼の優しい一途さと本気度にほだされた。ヴィオレッタは、そのアルフレードがまるごと承知してくれた汚れた過去を拭い去り、一緒になってもいいと心に決めて同棲し始めたのに。とたんに、別れてくれと彼の父親にせがまれ、さんざんと遊女に対する世間体の煩さを説かれ、田舎の家族や親類に波及する不幸をあげつられ、それでも諦めきれない。あと1年もない命のあいだに、せめて人並みに男女の相思相愛の暮らしを望んで何が悪いのだ、と叫んだヴィオレッタ。でも、彼にはまだまだ何十年という夢多き未来人生が残され、それに傷がついて台無しになることも明確に判る。どうすればいいのか。ヴィオレッタは悶えたが、その対処に必要な生命の日々が余り残されていない。

という事情までは理解できたが、当時はそこまでだった。余りにもドラマチックで美しい悲歌：エレジーに彩られた音楽に感激して、「可哀そうに」という同情だけ。なお、悲歌は悲歌なればなるほど官能的な情感を漂わせ、人々を耽溺させてしまう。ゆえに、真の悲しさは実体験と共鳴しなければ、劇薬のように胸に沁みてこない。

この国においても、同じような悲劇の実話があったことを思い出した。昭和38年頃に、とある若い恋人どうしの交換書簡が集積された実話に基づく「愛と死をみつめて」という映画が公開された。誰にも邪魔されずに必死に看病する彼：マコが不治の病の彼女：ミコの死を見つめて彼女がああ世に昇天する際までが克明にドラマ化された。まさに純愛の極みであった。しかしながら、それだけだった。ほぼ永遠に見える将来を背負った溘瀨たる若者には、昭和のフラフープのような一時の流行でしかなかった。仕方ない。

いや、そんなもんじゃないと、19世紀のヴェルディは作り上げた。魂にまで響く歌を、今になって味わって震えているが。私には遅い。命の終止符を知った74歳になって、やっと私の胸に突き刺さってくる。ヴィオレッタの咽び泣く声が。

この作品はヴェルディ唯一のプリマドンナ・オペラであった。歌劇の巨匠ヴェルディが創ったから、永遠に何千回、何万回も世界中で上演され、凍り付くほどの悲劇であっても少しずつ暖められて凍らずに氷河の底に埋められずに、絶えず私たちに愛聴され親しまれていくのであ

ろう。至高の芸術の凄みはそこにある。まさに、『椿姫』というオペラでヴェルディは、彼女の菩提をも弔ったともいえる。私も後に付いて僅かばかりの手向けの祈りを捧げてきたが、クラシック巡礼として採り上げないわけにはいかないほど、悲しい物語でもある。

<http://www2.tbb.t-com.ne.jp/meisakudrama/meisakudrama/index.html>

椿姫	小説	アレクサンドル・デュマ・フィス／作	(1848年)
ラ・トラヴィアータ	オペラ	ジュゼッペ・ヴェルディ／作曲	(1853年)

<原作とそのモデルについて>

19世紀半ば、パリの裏社交界では、若さと美しさを武器に男から金を吸い上げる高級娼婦たちが騒々しく派手な生活を送っていた。今も昔も変わらない。食べ物にされるのは、たいがい成金の金持ちである。さりながら、そんな派手な毒々しい女郎蜘蛛の中にも不幸な女がいた。いつも椿の花で身を飾っている椿姫はその中で最も美しく金使いの荒い遊女のうちの一人として有名だった。が、肺を患っており、自分の命がそんなに長くない事を知っていた。罪深い女としての惨めな末路が見えて来たヴィオレッタ（マルグリット）は、心の救いを求めながらも得られず、放埒な生活で死の不安を紛らわせ、病状を悪化させて行った。

そこへアルフレード・ジェルモン（アルマン・デュヴァール）という青年が現れ、ヴィオレッタ（マルグリット）の身体を心配し、心からの愛を告白した。ヴィオレッタは心を動かされ、アルフレード（アルマン）を商売抜きの愛人にした。世間知らずで純情なアルフレードの愛は、男と嘘と金銭トラブルでまみれたヴィオレッタの生活と摩擦を起こしたが、彼女は次第に彼の一途な愛に心を奪われるようになった。パリでの贅沢な生活は意味を失い、彼女はパトロンたちとも高級娼婦としての生業とも縁を切った。そして静かな郊外でアルフレードとのつつましく清らかな愛の生活に残された人生のすべてを賭けるようになった。

しかし二人の仲はアルフレードの父親の知るところとなり、父親はヴィオレッタを訪れ、「たとえ二人の愛が本物であり、あなたが改心したと言っても、一度道を踏み外した女を世間は許さない。息子を本当に愛しているのなら、今のうちに別れて欲しい。」と説得した。父親の説得に現実に帰ったヴィオレッタは、アルフレードの将来を守るために、唯一の希望である愛の生活をあきらめて身を引く決心をした。パリに戻ったヴィオレッタは、心ならずも新しいパトロンを作り、高級娼婦稼業に戻った。事情を知らないアルフレードは裏切られたと思い込み、彼女を苛んでリベンジする事に激しい情熱を傾けた挙句、それでも治らない傷ついた心を抱いて外国へ旅立った。

身も心も深く傷ついたヴィオレッタの病状はどんどんと悪化し、ついに死の床についた。世間からは全く忘れ去られ、誰からも見捨てられてしまったが、心の中はアルフレードへの愛に満たされていた。いつか彼が別れの本当の理由を知る事を願って、事の顛末を手記に書き記し、自分の死後アルマンに渡してくれるように、と友人に託した。アルフレードはヴィオレッタの危篤を知り、急いで

パリへ向かったが、間に合わず、ヴィオレッタは最後までアルフレードへの愛を唯一の希望として再会を死の床で待ち続けたが、孤独のうちにその短い生涯を終えた。

すべてを「私 (アレクサンドル・デュマ・フィス)」に語り終えたアルフレードは心の重荷を降ろしたかのように見え、目に見えて回復していった。そして二人でヴィオレッタの墓に詣で、その後「私」はアルフレードと共に故郷のアルフレードの父親、デュヴァール氏を訪れた。そしてアルフレードを愛情にあふれた父親や妹に引き渡して安心した「私」はパリへ戻り、この物語を一気に書き上げた。

「私」は最後にこう記している。——娼婦に同情の目を持ってこのような物語を書いた事を不愉快に思う人がいるかもしれない。しかしたとえ娼婦であっても、真の愛に目覚めて悔い改め、悩み苦しんだ後に浄化される者もいるのだ。稀なケースではあろうが、ここに記したヴィオレッタの物語は真実なのである。

オペラ『椿姫』

Verdi "La Traviata" Carlos Kleiber / München Live 1975 ヴェルディ「椿姫」カルロス・クライバー ミュンヘンライブ - YouTube



カーロス・クライバー指揮
「椿姫」

第1幕（時節は8月頃）

時は19世紀半ば、舞台はパリ。社交界一人気のある高級娼婦ヴィオレッタの館では、いつものように華やかな宴が催されている。この宴にやって来た青年アルフレードは、「乾杯の歌」を歌って場を盛り上げる。

彼は以前からヴィオレッタに恋慕してきた。ついに、二人きりになると、彼女にその気持ちを打ち明けた。ヴィオレッタは、娼婦である自分は本当の恋愛などに縁はないと思っていたが、若く逞しいアルフレードの純情な告白の前に、かつて経験したこともない喜悦に、何故かとまどらばかり。こういうように迫られたことは、毎度のように

起きたが、彼女はいつものように上手にすかしてかわしてきたのに。相手が傷つかないギリギリを見切って、夢を破壊しないように弄んだ。つまり、お得意さんに仕上げてきた。その技は達人の域に達していた。相手もそれを心得ていた。独占すれば同じような下心をもつ他の顧客たちに影響して来なくなって、歓楽のパーティが開かれなくなってしまふからである。

しかしながら、アルフレードは田舎者でそういった所業に慣れていない。困ったものであるが、ヴィオレッタには受け入れてしまう事情があったのだ。

パリの社交界の華やかさを思わすいかに華やいだ音楽で幕が開く。人々のさんざめき、第1ヴァイオリンにともなわれて人々の合唱がうたわれる。レチタティーヴォ風な部分でアルフレードがヴィオレッタに紹介される。気ままなおしゃべりが繰り返される。乾杯の歌を求める声が高まり、音楽がひととき熱気を運び、フェルマータのついた休止符を挟んで「乾杯の歌(合唱)」にうつる。

[椿姫 乾杯の歌 ホセ・カレーラス & レナータ・スコット 1973 - YouTube](#)



「乾杯の歌」 新国立劇場 オペラ (jac.go.jp)

乾杯の歌(合唱)

前奏曲のあとにすぐに出てくる合唱にソロ主人公2人を含めた非常に有名な曲。

3/8拍子の伴奏音型は、19世紀前半のイタリア・オペラでしばしば聴かされる余りにもステロ・タイプなものではあるが、ここでは、酒をたたえる歌にいかにもふさわしい気分をかもしている。前奏に出るメロディー

を、まずアルフレードが歌い、それに合唱が応え、ヴィオレッタが歌い継いでいく。

<p>ALFREDO</p> <p>■ Libiam ne' lieti calici</p> <p>Che la bellezza infiora, E la fuggevol ora S'inebri a voluttà. Libiam ne' dolci fremiti Che suscita l'amore, Poiché quell'occhio al core indicando Violetta Onnipotente va. Libiamo, amor fra i calici Più caldi baci avrà.</p>	<p>【アルフレード】</p> <p>■ 酌み交わそう、喜びの酒杯を</p> <p>美しい花と共に。 そしてつかの間の時間、 喜悦で酔いしれる。 飲もうじゃないか、甘いときめきが 恋を鼓舞するのだ。 抗いがたい眼差しが (ヴィオレッタを指す) 私の心を誘うがゆえに。 酌み交わそう、愛の杯を 口づけは熱く燃えるのだ。</p>
<p>TUTTI</p> <p>Libiamo, amor fra i calici Più caldi baci avrà.</p>	<p>【全員】</p> <p>酌み交わそう、愛の杯を 口づけは熱く燃えるのだ。</p>
<p>VIOLETTA</p> <p>S'alza Tra voi saprò dividere Il tempo mio giocondo; Tutto è follia nel mondo Ciò che non è piacer. Godiam, fugace e rapido È il gaudio dell'amore; È un fior che nasce e muore, Né più si può goder. Godiam c'invita un fervido Accento lusinghier.</p>	<p>【ヴィオレッタ】</p> <p>(立ち上がる)</p> <p>皆様と一緒になら、楽しい時を 分かち合うことができます。 この世は愚かなことで溢れてる、 楽しみ以外は。 楽しみましょう、儂く去るのです、 愛の喜びとて。 咲いては散る花のように、 二度とは望めないのです。 楽しみましょう、焼け付くような 言葉が誘うままに。</p>
<p>TUTTI</p> <p>Godiam la tazza e il cantico La notte abbella e il riso; In questo paradiso Ne scopra il nuovo dì.</p>	<p>【全員】</p> <p>楽しもう、酒杯と歌は 夜と笑いを美しくするのだ。 この楽園の中で 新たな日が、私たちを見出すように。</p>

次の間から微かにワルツが響いてくる。舞踏会の準備ができたのである。人々はそこに向けて去っていく。ひとり残るヴィオレッタ、それをじっと見ているアルフレード。

「ある日、幸せに満ちたように」

ヴィオレッタとアルフレードの対話。二重唱

アルフレードの愛の告白によって開始される。

この告白の後半は、この幕の終わりでヴィオレッタの独白にかぶさるアルフレードの歌声としてふたたび聴かれる。そして二重唱。

とまどうヴィオレッタ、愛の苦しみと歓びをうたうアルフレード。

<p>■ Un dì, felice, eterea, Mi balenaste innante, E da quel dì tremante Vissi d'ignoto amor. Di quell'amor ch'è palpito Dell'universo intero, Misterioso, Misterioso, altero, Croce e delizia al cor.</p> <p>VIOLETTA</p> <p>Ah, se ciò è ver, fuggitemi Solo amistade io v'offro: Amar non so, né soffro Un così eroico amor. Io sono franca, ingenua; Altra cercar dovete; Non arduo troverete Dimenticarmi allor.</p>	<p>■ ある日、幸せに満ちたように、 私の前に稲光のごとく現れたのです。 あの日以来私は震えながら、 未知の愛に生きてきたのです。 その愛はときめき、 全宇宙の鼓動、 神秘的にして気高く、 心に苦しみと喜びをもたらす。</p> <p>【ヴィオレッタ】</p> <p>それならば私を避けてください。 貴方には友情のみを差し上げます。 私は愛を知りませんし、そのような 尊い愛を受けることは出来ません。 正直に申し上げます。 他の人をお探しください。 そうすれば、私を忘れることは 難しくはないでしょう。</p>
<p>繰り返し</p>	<p>繰り返し</p>
<p></p>	<p></p>

ああ、そは彼の人か(Ah,fors'e lui)～花から花へ(Sempre libera)

[ヴェルディ 《椿姫》 「そは彼の人か～花から花へ」 マリア・カラス・YouTube](#)

という2つの部分からなる「カヴァティーナ・カバレッタ」形式のアリアは、このオペラの最大の聞きどころの一つ。

まず、弦楽器だけに伴われたレチタティーヴォがある。不思議なときめきをいぶかしかるヴィオレッタ。

そして、アンダンティーノ、ヘ短調、3/8拍子による名高いアリア。

ああ、そは彼の人か(Ah,fors'e lui)

にうつっていく。ヴィオレッタは、単純ではあっても大変暗示に富んだ4小節の前奏をおいて歌い始める。思いに沈むヴィオレッタである。

やがてヘ短調に転じて、二重唱におけるアルフレードの言葉を思い出す。だが、それを吹っ切ろうとするかのように激しいレチタティーヴォ。

馬鹿な考え！これは虚しい夢なのよ！：花から花へ

そしてアリアの後半、カヴァレッタ。いくぶん自暴自棄になっているヴィオレッタは、パリの社交界での快楽に満ちた毎日を称えようとする。

だが、先の二重唱の音楽をうたうアルフレードの声が屋外から聞こえてくる。真実の恋に憧れ、また、それがかなわぬものとして快楽の世界に身を投げ込もうと決心しようとし、どちらとも心に決めかねて、空が白んでいく中であって、ヴィオレッタの心は千々に乱れていく。

[カバティーナとは・コトバンク \(kotobank.jp\)](#)

カバティーナ

18、19世紀のオペラやオラトリオ中の独唱曲。本来レチタティーボ recitativo(叙唱)から派生したため、アリアのような華やかな性格はなく、簡潔な表現を旨としている。したがって、アリアに使われるダ・カーポ形式(A—B—Aの三部形式)や、はでなコロラトゥーラなどはあまりみられない。オラトリオではハイドンの『四季』に、オペラではモーツァルトの『フィガロの結婚』や、ウェーバーの『魔弾の射手』などにこの例がみられる。19世紀には、ベートーベンの弦楽四重奏曲第13番の第5楽章のように、歌謡的性格をもつ器楽曲にもこの名が使われた。

18～19世紀のオペラ、オラトリオ中の、フレーズや歌詞の反復の少ない、アリアよりも単純な形式による抒情的独唱曲。モーツァルトの『フィガロの結婚』にある3つのカバティーナが有名。19世紀には器楽曲の名称としても用いられた。

[カバレッタとは・コトバンク \(kotobank.jp\)](#)

ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典

「カバレッタ」の解説

音楽用語。本来は、いきいきとした様なリズムと、反復される部分をもつ短いアリアをさしたが、のちに幕切れのアリアなどの最後のはなやかな部分をさすようになった。後者の例は、ベルディに多い。

【アリア】より カバレッタとは

…19 世紀に入ると、ワーグナーのように、ドラマの自然な流れを損なうとの立場からアリアを排撃する者も現れたが、イタリア風のオペラでは引き続きアリアが重要な役割を占め、アリアなしの名場面は考えることができない。ベルディの作品では、1 曲のアリアは、カバティーナとよばれる抒情的な部分と、カバレッタとよばれる劇的に高潮した部分とから成ることが多い。20 世紀の作品では、一般に音楽とドラマが密着し、音楽的表現が多面的となったのに伴って、アリアは以前ほど顕著な役割を占めていない。…

VIOLETTA

■ **È strano! è strano! in core**

Scolpiti ho quegli accenti!
Saria per me sventura un serio amore?
Che risolvi, o turbata anima mia?
Null'uomo ancora t'accendeva O gioia
Ch'io non conobbi, essere amata amando!
E sdegnarla poss'io
Per l'aride follie del viver mio?

Ah, fors'è lui che l'anima

Solinga ne' tumulti
Godea sovente pingere
De' suoi colori occulti!
Lui che modesto e vigile
All'egre soglie ascese,
E nuova febbre accese,
Destandomi all'amor.
A quell'amor ch'è palpito
Dell'universo intero,
Misterioso, altero,
Croce e delizia al cor.
A me fanciulla, un candido
E trepido desire
Questi effigiò dolcissimo
Signor dell'avvenire,
Quando ne' cieli il raggio
Di sua beltà vedea,
E tutta me pascea

【ヴィオレッタ】

■ **おかしいわ！不思議ね！心の中に**

彼の言葉が刻まれている！
真実の愛は、私には不幸なのかしら？
私の乱された心よ、どうすればいいの？
今まで心を燃え上がらせる方などいなかった。
今まで知らなかった喜びだわ、愛し合うことなんて！
私はそれを退けることが出来るかしら？
不毛で愚かな私の生き方のために。

ああ、きっと彼だったのよ、

喧騒の中でも孤独な私の魂が、
神秘的な絵の具で
思い描いていたのは！
彼は慎み深い態度で
病める私を見舞ってくれて、
新たな情熱を燃やし、
私を愛に目覚めさせたんだわ。
その愛はときめき、
全宇宙の鼓動、
神秘的にして気高く、
心に苦しみと喜びをもたらす。
無垢な娘だった私に、
不安な望みを
描いてくれたの、とても優しい
将来のご主人様は。
空にこの人の美しさが放つ
光を見たとき、
私の全てはあの神聖な

<p>Di quel divino error. Sentia che amore è palpito Dell'universo intero, Misterioso, altero, Croce e delizia al cor!</p> <p>Resta concentrata un istante, poi dice</p>	<p>過ちでいっぱいでした。 私は感じていたのです、愛こそが 全宇宙の鼓動であり、 神秘的にして気高く、 心に苦しみと喜びをもたらすと！</p> <p>(一瞬思いにふけるが、その後に言う)</p>
---	--

<p>■ Follie! follie delirio vano è questo!</p> <p>Povera donna, sola Abbandonata in questo Popoloso deserto Che appellano Parigi, Che spero or più? Che far degg'io! Gioire,</p> <p>Di voluttà nei vortici perire.</p> <p>Sempre libera degg'io</p> <p>Folleggiar di gioia in gioia, Vo' che scorra il viver mio Pei sentieri del piacer, Nasca il giorno, o il giorno muoia, Sempre lieta ne' ritrovi A dilette sempre nuovi Dee volare il mio pensier.</p>	<p>■ 馬鹿な考え！これは虚しい夢なのよ！</p> <p>哀れな女、ただ一人 見捨てられた女、 人々がバリと呼ぶ、 人の砂漠の中に。 今更何を望めばいいの？ 何をすればいいの？ 楽しむのよ、 喜びの渦の中で消えていくのよ。 私はいつも自由に、</p> <p>快楽から快楽へと遊べばいいの、 私が人生に望むのは、 快楽の道を歩み行くこと、 夜明けも日暮れも関係ない、 華やかな場所で楽しくして、 いつも快楽を求め、私の思いは 飛び行かなければならないの。</p>
--	---

第2幕（時節は1月頃）

ヴィオレッタは、アルフレードの熱愛告白にほだされたこと、自分の末期的な持病のことさえも理解してくれた。結局、彼を受け容れてしまった。そして、社交界を離れ、パリ郊外の家でアルフレードと静かに、そして幸せに暮らし始めていた。ある日、アルフレードの留守中に、彼の父ジェルモンが訪ねてくる。ジェルモンは、娼婦というヴィオレッタの過去が、娘（アルフレードの妹）の縁談に差し障りとなるので、息子と別れるよう彼女に迫る。ヴィオレッタは自分の真実の愛を必死で訴えるが、受け入れられず、悲しみの中で別れを決意。家を出ていく。別れの置き手紙を読んだ何も知らないアルフレードは、彼女の裏切りに激怒したのです。

その夜、ヴィオレッタはパリの社交界に戻り、かつてパトロンだった男爵に手を引かれて現れる。彼女を追ってきたアルフレードは、ヴィオレッタが男爵を愛していると苦しまぎれに言うのを聞いて逆上。彼は社交界の大勢の人前で彼女をひどく侮辱して悲しませる。

第2幕・第1場

アルフレードとのつつましい愛の生活を選び、二人は郊外で暮らすようになったが、生活資金が底をつき、ヴィオレッタは馬車や宝石を売り払った。それをアルフレードが知り、お金を工面して馬車や宝石を取り戻そうとパリへ出かけて行った。（「僕の燃え滾る魂の」が歌われる。）

そこへアルフレードの父親ジェルモンが現れて、「息子とあなたの関係のせいで娘の縁談が破談になりかかっているの、今すぐ息子と別れるように」と、迫った。

ヴィオレッタは、どんなに自分が真剣にアルフレードを愛しているか、また自分は卑しい稼業からは足を洗い、贅沢品も売り払って、アルフレードとつつましく暮らしている事を切々と訴えた。

しかし、いくら改心しても、一度道を踏み外した女を世間は決して許さない、長い年月がたてば恋も覚め、その時あなたと一緒にあった事で世間からはじかれた息子はあなたを恨むようになるだろう、とジェルモンに説得され、ヴィオレッタは厳しい現実目に向けて、アルフレードと別れる決心をした。

ヴィオレッタとジェルモンの二重唱

「天使のように清らかな娘を神様は私に授けて下さった」～「どうぞお話になってください、美しく清らかなお嬢さんに」

ヴィオレッタはアルフレードに手紙を残した。内容は、「暮らし向きが貧しくなるばかりだから、パリの夜の世界に戻り、かねてから誘いのあったドゥフォール男爵の囲い者になるつもり。あなたは私から離れて将来豊かな人生に邁進してほしいと」、いうものであった。

手紙にしたためておいて行くが、それを読んだアルフレードは気が狂ったようになった。再びジェルモンが現れて、アルフレードを正気に返らせ、故郷へ連れて帰ろうとした。（「プロヴァンスの海と大地を」が歌われる）しかしヴィオレッタに裏切られたと思ったアルフレードは復讐心に燃え、ヴィオレッタを追いかけてパリへ行ってしまった。

第9曲 アダージョ

アンニーナを呼んで、フローラの舞踏会に出席する旨をしるした手紙を持たせる。

悲しみに打ちひしがれたヴィオレッタを慰めるかのようにクラリネットが響く。

アレグロに転じて、突然のアルフレードの登場。ヴィオレッタが手紙を書いていることをいぶかるアルフレード。音楽は高潮していく。

アレグロ・アッサイ・モツソ 2/2拍子 乱れ切ったヴィオレッタの心を示しているかのようにその言葉は混乱している。それとはなしに別れを告げるヴィオレッタ。

そして、緊張きった音楽が、そのようなヴィオレッタの悲しみを強調する。この部分は、歌うのに並外れたテクニックを必要とする。

第10曲 事の次第を知らないアルフレードは、父ジェルモンの来るのを待っている。そこにヴィオレッタからの手紙が届く。低音源のトレモロがアルフレードの不安を示す。

驚き、絶望するアルフレードを抱きとめるジェルモン。

ここで、ジェルモンによる名高いアリア

プロヴァンスの海と砂

父親の温かい懐を示すかの如く、音楽も広く豊かである。ジェルモンは、このアリアによって息子を故郷へいざなう。

が、アルフレードはジェルモンを止めるのを訊かずに、ヴィオレッタに仇を打つために出かけていく。音楽は不安をたたえて盛り上がる。

<p>GERMONT</p> <p>Si.</p> <p>■ Pura siccome un angelo</p> <p>Iddio mi die' una figlia; Se Alfredo nega riedere In seno alla famiglia, L'amato e amante giovane, Cui sposa andar dovea, Or si ricusa al vincolo Che lieti ne rendea Deh, non mutate in triboli Le rose dell'amor. Ai preghi miei resistere Non voglia il vostro cor.</p> <p>VIOLETTA</p> <p>Ah, comprendo dovrò per alcun tempo Da Alfredo allontanarmi... doloroso</p>	<p>【ジェルモン】</p> <p>そうです。</p> <p>■ 天使のように純真な娘を、 神はお与えくださった。 もしアルフレードが、家族のもとへ 戻ることを拒むのなら、 娘が愛し愛される青年は、 そこに嫁ぐことになっている、 あの約束を拒むのです。 私たちを喜ばせていた約束を、 どうか愛のバラを、 茨に変えないようにしてください。 貴女の心が、私の願いに 抵抗しませんように。</p> <p>【ヴィオレッタ】</p> <p>分かりました、しばらくの間 アルフレードと離れていましょう・・・</p>
---	--

<p>Fora per me... pur...</p> <p>GERMONT</p> <p>Non è ciò che chiedo.</p> <p>VIOLETTA</p> <p>Cielo, che più cercate? offersi assai!</p> <p>GERMONT</p> <p>Pur non basta</p> <p>VIOLETTA</p> <p>Volete che per sempre a lui rinunzi?</p> <p>GERMONT</p> <p>È d'uopo!</p>	<p>私には辛いことですが・・・でも・・・</p> <p>【ジェルモン】</p> <p>いや、私の願いはそうではない。</p> <p>【ヴィオレッタ】</p> <p>これ以上何をお求めに？ずいぶん譲歩しましたのに！</p> <p>【ジェルモン】</p> <p>それでは不十分なのです。</p> <p>【ヴィオレッタ】</p> <p>永遠の別れを、お望みなのですか？</p> <p>【ジェルモン】</p> <p>その必要があるのです！</p>
--	--

<p>VIOLETTA</p> <p>Ah, no giammai!</p> <p>■ Non sapete quale affetto</p> <p>Vivo, immenso m'arda in petto?</p> <p>Che né amici, né parenti</p> <p>Io non conto tra i viventi?</p> <p>E che Alfredo m'ha giurato</p> <p>Che in lui tutto io troverò?</p> <p>Non sapete che colpita</p> <p>D'altro morbo è la mia vita?</p> <p>Che già presso il fin ne vedo?</p> <p>Ch'io mi separi da Alfredo?</p> <p>Ah, il supplizio è sì spietato,</p> <p>Che morir preferirò.</p> <p>GERMONT</p> <p>È grave il sacrificio,</p> <p>Ma pur tranquilla udite</p> <p>Bella voi siete e giovane...</p> <p>Col tempo...</p>	<p>【ヴィオレッタ】</p> <p>ああ、嫌です絶対に！</p> <p>■ ご存じないのですね、どれほど</p> <p>激しい愛情が、私の胸のうちにあるのかを？</p> <p>私には友人も、身寄りも</p> <p>この世にはいないということを？</p> <p>アルフレードが、それらの代わりに</p> <p>なると、誓ってくれたことを？</p> <p>ご存知ではないのですか、</p> <p>私の体が病魔に侵されているのを？</p> <p>すでに最後の時が近いというのを？</p> <p>それでもアルフレードと別れると？</p> <p>ああ、あまりにも酷い仕打ちです、</p> <p>いっそ死んだほうがましです。</p> <p>【ジェルモン】</p> <p>非常に苦しい犠牲ですが、</p> <p>落ち着いて聞いてください。</p> <p>貴女は若くて美しい・・・</p> <p>しかし、時が経てば・・・</p>
--	--

<p>VIOLETTA Ah, più non dite V'intendo... m'è impossibile Lui solo amar vogl'io.</p> <p>GERMONT Sia pure... ma volubile Sovente è l'uom</p> <p>VIOLETTA colpita Gran Dio!</p>	<p>【ヴィオレッタ】 ああ、もう言わないでください、 分かりますが・・・出来ないのです、 彼以外は愛せないのです。</p> <p>【ジェルモン】 そうかも知れぬが・・・男とは 移り気なものですぞ。</p> <p>【ヴィオレッタ】 (ショックを受けて) ああ、神よ！</p>
---	---

<p>GERMONT ■ Un dì, quando le veneri Il tempo avrà fugate, Fia presto il tedio a sorgere Che sarà allor? pensate Per voi non avran balsamo I più soavi affetti! Poiché dal ciel non furono Tai nodi benedetti.</p> <p>VIOLETTA È vero!</p> <p>GERMONT Ah, dunque sperdasi Tal sogno seduttore Siate di mia famiglia L'angiol consolatore Violetta, deh, pensateci, Ne siete in tempo ancor. È Dio che ispira, o giovine Tai detti a un genitor.</p>	<p>【ジェルモン】 ■ その美しさが時と共に消えたとき 時と共に消えたとき、 早々に倦怠が頭をよぎる、 その時どうなるでしょう？考えてください、 貴女にとって、安らぎとはならぬでしょう、 最高に甘い愛情も！ というのも、天から祝福された 結びつきではないからです。</p> <p>【ヴィオレッタ】 その通りです！</p> <p>【ジェルモン】 ああ、ですから諦めるのです、 そのような儂い夢を、 そして私の家族の 救いの天使になってください。 ヴィオレッタさん、考えてください まだ間に合うのですから。 若いご婦人よ、神様なのです、 このような言葉を言わせ給うのは。</p>
--	---

<p>VIOLETTA</p> <p>con estremo dolore</p> <p>(Così alla misera - ch'è un dì caduta,</p> <p>Di più risorgere - speranza è muta!</p> <p>Se pur beneficio - le indulga Iddio,</p> <p>L'uomo implacabile - per lei sarà)</p> <p>a Germont, piangendo</p>	<p>【ヴィオレッタ】</p> <p>(極度の苦しみと共に)</p> <p>「ひとたび墮ちてしまった女には、立ち上がる希望などないのね！</p> <p>例え慈悲深い、神がお許しくださっても、人はそんな女に、容赦はしないんだわ」</p> <p>(ジェルモンに対して、泣きながら)</p>
--	--

<p>VIOLETTA</p> <p>■ Ah! Dite Alla Giovine - sì bella e pura</p> <p>Ch'avvi una vittima - della sventura,</p> <p>Cui resta un unico - raggio di bene</p> <p>Che a lei il sacrifica - e che morrà!</p> <p>GERMONT</p> <p>Sì, piangi, o misera - supremo, il veggo,</p> <p>È il sacrificio - ch'ora io ti chieggo.</p> <p>Sento nell'anima - già le tue pene;</p> <p>Coraggio e il nobile - cor vincerà.</p> <p>Silenzio</p>	<p>【ヴィオレッタ】</p> <p>■ 美しく清らかなお嬢様に、お伝えください、不幸にも犠牲を払う女がいると、一筋の幸せの光しか残されていないのに、お嬢様のために、それを諦め死んでゆくと！</p> <p>【ジェルモン】</p> <p>そうだ、泣きなさい、可哀想に、分かっている、私の求めるものが、大きな犠牲だということは。私は魂の中に、貴女の苦悩を感じます、勇気をだしてください、高貴な心は勝利します。</p> <p>(黙る)</p>
--	--

<p>=====</p> <p>VIOLETTA</p> <p>■ Or imponete.</p> <p>GERMONT</p> <p>Non amarlo ditegli.</p> <p>VIOLETTA</p> <p>Nol crederà.</p> <p>GERMONT</p>	<p>=====</p> <p>【ヴィオレッタ】</p> <p>■ さあ、命じてください。</p> <p>【ジェルモン】</p> <p>愛していないと言うのです。</p> <p>【ヴィオレッタ】</p> <p>彼は信じないわ。</p> <p>【ジェルモン】</p>
---	--

Partite.	立ち去るのです。
VIOLETTA	【ヴィオレッタ】
Seguirammi.	追ってくるでしょう。
GERMONT	【ジェルモン】
Allor...	それならば...
VIOLETTA	【ヴィオレッタ】
Qual figlia m'abbracciate forte	娘として抱きしめてください、
Così sarò.	強くなれるでしょうから。
S'abbracciano	(抱きしめあう)
Tra breve ei vi fia reso,	まもなく彼は、貴方様の許に戻るでしょう、
Ma afflitto oltre ogni dire. A suo conforto	言葉では表せぬほど傷ついて。早く戻って、
Di colà volerete.	彼を慰めてあげてください。
Indicandogli il giardino, va per scrivere	(庭を指差し、手紙を書く)
GERMONT	【ジェルモン】
Che pensate?	何を考えているのですか？
VIOLETTA	【ヴィオレッタ】
Sapendol, v'opporreste al pensier mio.	お知りになれば、反対なさるでしょうから。
GERMONT	【ジェルモン】
Generosa! e per voi che far poss'io?	寛大な人だ！私に出来ることは ありますか？
VIOLETTA	【ヴィオレッタ】
tornando a lui	(彼の所に戻る)
Morrò! la mia memoria	私は死にます！私との思い出を、
Non fia ch'ei maledica,	彼が悪く言いませんように。
Se le mie pene orribili	せめて私の恐ろしい苦悩を、
Vi sia chi almen gli dica.	誰かが彼に伝えてくれたら。
GERMONT	【ジェルモン】
No, generosa, vivere,	いや、寛大な人よ、生きるのです、
E lieta voi dovrete,	幸せになるのです、
Merce' di queste lagrime	流す涙への報いは
Dal cielo un giorno avrete.	いつの日か、天が授けてくれます。

<p>VIOLETTA</p> <p>Conosca il sacrificio Ch'io consumai d'amor Che sarà suo fin l'ultimo Sospiro del mio cor.</p> <p>GERMONT</p> <p>Premiato il sacrificio Sarà del vostro amor; D'un opra così nobile Sarete fiera allor.</p> <p>VIOLETTA</p> <p>Qui giunge alcun: partite!</p> <p>GERMONT</p> <p>Ah, grato v'è il cor mio!</p> <p>VIOLETTA</p> <p>Non ci vedrem più forse.</p> <p>S'abbracciano</p> <p>A DUE</p> <p>Siate felice Addio! Germont esce per la porta del giardino</p>	<p>【ヴィオレッタ】</p> <p>私が愛ゆえに果たした犠牲を、 彼が知ってくださいませよう、 最後の吐息までもが、 彼のものだということを。</p> <p>【ジェルモン】</p> <p>貴女の愛の犠牲は 報われるでしょう、 その時、このような気高い行為を、 貴女は誇りに思うでしょう。</p> <p>【ヴィオレッタ】</p> <p>誰か来ます、行ってください！</p> <p>【ジェルモン】</p> <p>ああ、心から貴女に感謝します！</p> <p>【ヴィオレッタ】</p> <p>もうお会いすることはないでしょう。</p> <p>(抱きしめあう)</p> <p>【二人で】</p> <p>お幸せに、さようなら！ (ジェルモンは庭側の扉から出る)</p>
--	--

<p>SCENA VI</p> <p>Violetta, poi Annina, quindi Alfredo</p> <p>VIOLETTA</p> <p>■ Dammi tu forza, o cielo!</p> <p>Siede, scrive, poi suona il campanello</p>	<p><第6場></p> <p>(ヴィオレッタ、次にアンニーナ、そしてアルフレード)</p> <p>【ヴィオレッタ】</p> <p>■ 神よ、力を与えてください！</p> <p>(座って手紙を書き、鈴を鳴らす)</p>
--	--

<p>ANNINA Mi richiedeste?</p> <p>VIOLETTA Sì, reca tu stessa Questo foglio</p> <p>ANNINA ne guarda la direzione e se ne mostra sorpresa</p> <p>VIOLETTA Silenzio v`a all'istante Annina parte Ed ora si scriva a lui Che gli dirò? Chi men darà il coraggio?</p> <p>Scrive e poi suggella</p>	<p>【アンニーナ】 お呼びでしょうか？</p> <p>【ヴィオレッタ】 ええ、この手紙を 届けてちょうだい。</p> <p>【アンニーナ】 (宛名を見て驚いた様子を見せる)</p> <p>【ヴィオレッタ】 何も言わずにすぐに行って。 (アンニーナは出発する) 次は彼に書かないといけないわ、 何と言えど？誰か力を与えてくれないかしら？</p> <p>(書き終わって封をする)</p>
---	--

<p>SCENA VIII Alfredo, poi Germont ch'entra in giardino</p> <p>ALFREDO Di Violetta! Perché son io commosso! A raggiungerla forse ella m'invita o tremo! Oh ciel! Coraggio! Apre e legge "Alfredo, al giungervi di questo foglio" come fulminato grida Ah! Volgendosi si trova a fronte del padre, nelle cui braccia si abbandona esclamando: Padre mio!</p> <p>GERMONT Mio figlio! Oh, quanto soffri! tergi, ah, tergi il pianto</p>	<p><第8場> (アルフレード、次に庭の方から入ってきたジェルモン)</p> <p>【アルフレード】 ヴィオレッタからだ！なぜ胸騒ぎがするのだ！ 後から来るように言ってるのかな。 身が震える！ああ！勇気を出すんだ！ (開封して読む) 「アルフレード、この手紙が届く頃には」 (雷に打たれたかのように叫ぶ) ああ！ (振り返ると父がいるのに気づく、そして叫びながら父の腕の中に飛び込む) 父さん！</p> <p>【ジェルモン】 息子よ！ 何と苦しんでいるのだ！涙を拭うのだ、</p>
--	---

<p>Ritorna di tuo padre orgoglio e vanto</p> <p>ALFREDO Disperato, siede presso il tavolino col volto tra le mani</p> <p>GERMONT ■ Di Provenza il mar, il suol – chi dal cor ti cancello? Al natio fulgente sol – qual destino ti furò? Oh, rammenta pur nel duol – ch’ivi gioia a te brillò; E che pace colà sol – su te splendere ancor può. Dio mi guidò! Ah! il tuo vecchio genitor – tu non sai quanto soffri Te lontano, di squallor il suo tetto si copri Ma se alfin ti trovo ancor, – se in me speme non falli, Se la voce dell’onor – in te appien non ammutì, Dio m’esaudi! abbracciandolo Né rispondi d’un padre all’affetto?</p> <p>ALFREDO Mille serpi divoranmi il petto respingendo il padre Mi lasciate.</p> <p>GERMONT Lasciarti!</p> <p>ALFREDO risoluto (Oh vendetta!)</p>	<p>もう一度戻ってくれ、お前の父の自慢の種に。</p> <p>【アルフレード】 (絶望し、手で顔を覆ってテーブルの近くに座り込む)</p> <p>【ジェルモン】 ■ プロヴァンスの海と大地を、 誰がお前の心から奪ったのだ？ 故郷の輝かしい太陽から、いかなる運命がお前を奪った？ 苦しいのなら思い出せ、そこでは喜びに包まれていたことを。 お前の平穩は、そこにだけあるということ。 神のお導きなのだ！ 年老いた父親の苦しみを、お前は知らないだろう、お前が去ってから、家中が悲しみに覆われていた、だが、お前に会えたのだから、希望が潰えなかったのだから、 お前の名誉の聲が、まだ聞こえていたのだから、 神はお聞き届けくださったのだ！ (抱擁して) 父親の愛情に応えてくれないのか？</p> <p>【アルフレード】 胸を搔きむしられるようだ。 (父親を突き返して) 放っておいてくれ。</p> <p>【ジェルモン】 放っておくだと！</p> <p>【アルフレード】 「復讐だ！」 (果敢に)</p>
--	---

第2幕 第2場

ヴィオレッタの仲間の高級娼婦フローラの家で仮装舞踏会が開かれている。ジプシーや闘牛士に扮したダンサーたちの踊りが場を華やかに盛り上げていた。

アルフレードは賭博に興じていると、そこへパトロンのドゥフォール男爵と共にヴィオレッタが現れた。アルフレードと男爵は賭博で勝負をし、陰悪な雰囲気になった。ヴィオレッタはアルフレードに、男爵はあなたをよく思っていないから、ここを去るように、と言うが、アルフレードは、ドゥフォール男爵はじめみんなを呼び集めて、賭けで勝ったお金で借りを返すと言って、ヴィオレッタに紙幣の束を投げつけた。彼女が手紙の中に生活費が必要だから稼ぎにパリにもどると。アルフレードを見捨てて男爵の囲い者になったのである。そう解釈して、そんなに金が要るならと当てつけたのだ。

ヴィオレッタは余りのアルフレードの乱暴な振る舞いに、ショックのあまり、気絶・昏倒してしまった。

目の前で彼女を辱められたドゥフォール男爵は、アルフレードに決闘を申し込み、客たちも女性を侮辱したアルフレードを非難した。父ジェルモンも現れて、アルフレードを叱りつけた。(ヴィオレッタは悲痛な愛の叫び「**ねえ、アルフレード、この心の内、…すべては愛のため**」が歌われる。)

お互いの想いのすれ違いが起きてしまった。アルフレードは捨てられたと思い込み、ヴィオレッタはアルフレードが一時的に落胆しても自分から離れざるを得なくなる、と考えたのだが。

第11～15曲

まずは華やいだ音楽によって幕が上がる。

アレグロ・アリランテ ハ長調 4/4拍子 性格的に第1幕の幕開きの音楽に近い。スペインの闘牛士たちの合唱が始まる。

アレグロ・アッサイ・モツォ ハ長調 4/4拍子 そして途中から

アレグロ・アッサイ・ヴィヴォ ト短調 3/8拍子に転じている。ジプシー女と闘牛士の声が混ざり合って大きなクライマックスを形作る。

そこに、ヴィオレッタと仲睦ましく暮らしていると思われるアルフレードが、1人でやってくるので、居合わせた人たちが驚く。

アレグロ・アジタート ヘ短調 6/8拍子 アルフレードとドゥフォール男爵はトランプをして、アルフレードは勝ちまくる。人々は食事のために去っていく。

ヴィオレッタが戻ってくる。

アレグロ・アジタート・アッサイ・ヴィヴォ 変二長調 2/2拍子 悲しみに沈んでいるヴィオレッタ。そして、アルフレードも戻ってくる。二人は衝突。音楽は不安な落ち着いた気分をたたえたままである。怒ったアルフレードが人々を呼び寄せて、ヴィオレッタの不貞をなじる。

アレグロ・ソステヌート ハ長調 4/4拍子 そして賭けで勝った賞金をヴィオレッタに叩きつける。人々の非難が集中する。

ヴェロティシモ ハ短調 2・4拍子 非難の声が高まり切ったところで、父のジェルモンが現れ、息子の恥知らずな行為を恥じる。

ラルゴ 変ホ長調 4/4拍子 ジェルモンのアルフレードへの怒りの言葉は続き、アルフレードは己の行いを恥じ、それぞれの心の内を歌って、

アルフレード、この心の内、…すべては愛のため

幕切れのオーケストレーションを大きく盛り上げていく。

<p>SCENA X</p> <p>Detti, e molte signore mascherate da Zingare, che entrano dalla destra</p> <p>ZINGARE</p> <p>Noi siamo zingarelle</p> <p>Venute da lontano; D'ognuno sulla mano Leggiamo l'avvenir. Se consultiam le stelle Null'avvi a noi d'oscuro, E i casi del futuro Possiamo altrui predir.</p> <p>I.</p> <p>Vediamo! Voi, signora, Prendono la mano di Flora e l'osservano Rivali alquante avete.</p> <p>Fanno lo stesso al Marchese</p> <p>II.</p> <p>Marchese, voi non siete Model di fedeltà.</p> <p>FLORA</p> <p>al Marchese</p> <p>Fate il galante ancora? Ben, vo' me la paghiate</p> <p>MARCHESE</p> <p>a Flora</p> <p>Che dianci vi pensate? L'accusa è falsità.</p> <p>FLORA</p>	<p><第10場></p> <p>(前出の人たち、そして多くのジプシーの仮装をした女性たちが上手から入ってくる)</p> <p>【ジプシーたち】</p> <p>私たちはジプシーの女、 遠くから来たの。 皆様の手相を、 読んでさしあげましょう。 星に問いかければ、 分からぬことは何もない、 未来のことでも 占ってあげましょう。</p> <p>【ジプシー1】</p> <p>では見てみましょう！奥様、貴女には (フローラの手を取り、眺める) 恋敵がたくさんいますね。 (彼女たちは侯爵にも同様にする)</p> <p>【ジプシー2】</p> <p>侯爵様、貴方は 模範的な恋人とは言えませんね。</p> <p>【フローラ】</p> <p>(侯爵に) またいろいろと？ そうね、たっぷり支払っていただくわ。</p> <p>【侯爵】</p> <p>(フローラに) こんなことを信じるのかい？ 事実無根だよ。</p> <p>【フローラ】</p>
---	--

<p>La volpe lascia il pelo, Non abbandona il vizio Marchese mio, giudizio O vi farò pentir. TUTTI Su via, si stenda un velo Sui fatti del passato; Già quel ch'è stato è stato, Badate/Badiamo all'avvenir. Flora ed il Marchese si stringono la mano</p>	<p>狐は皮を剥がれても、 悪癖は直らないそうですよ。 私の公爵様、お気をつけください、 さもないと後悔しますよ。 【全員】 さあ、忘れましょう、 過ぎ去ったことは。 過去のことは過去のことだ、 未来のことを気にしよう。 (フローラと侯爵は手を取り合う)</p>
<p>VIOLETTA riavendosi ■ Alfredo, Alfredo, di questo core Non puoi comprendere tutto l'amore; Tu non conosci che fino a prezzo Del tuo disprezzo - provato io l'ho! Ma verrà giorno in che il saprai Com'io t'amassi confesserai Dio dai rimorsi ti salvi allora; Io spenta ancora - pur t'amerò.</p>	<p>【ヴィオレッタ】 (意識が戻る) ■ アルフレード、アルフレード、私の心の内、 全ては愛のためだとは、貴方には理解できないわね、 貴方はご存知ないわ、私の愛がこれほどとは、 軽蔑を受けてまでも、その証明をするほどとは！ でも、分かる時が来るはずですよ、 どれほど私の愛が深かったのか。 その時は後悔の念から、神がお救いくださるように、 私は死してなお、愛し続けます。</p>
<p>GERMONT ■ Di Provenza il mar, il suol - chi dal cor ti cancello? Al natio fulgente sol - qual destino ti furò? Oh, rammenta pur nel duol - ch'ivi gioia a te brillò; E che pace colà sol - su te splendere ancor può. Dio mi guidò! Ah! il tuo vecchio genitor - tu non sai quanto soffri Te lontano, di squallor il suo tetto si copri Ma se alfin ti trovo ancor, - se in me speme non falli, Se la voce dell'onor - in te appien non ammuti, Dio m'esaudi! abbracciandolo</p>	<p>【ジェルモン】 ■ プロヴァンスの海と大地を、 誰がお前の心から奪ったのだ？ 故郷の輝かしい太陽から、いかなる運命がお前を奪 った？ 苦しいのなら思い出せ、そこでは喜びに包まれていた ことを。 お前の平穏は、そこにだけあるということ。 神のお導きなのだ！ 年離れた父親の苦しみを、お前は知らないだろう、 お前が去ってから、家中が悲しみに覆われていた、 だが、お前に会えたのだから、希望が潰えなかったの だから、 お前の名誉の聲が、まだ聞こえていたのだから、 神はお聞き届けくださったのだ！ (抱擁して)</p>

Né rispondi d'un padre all'affetto?

父親の愛情に応えてくれないのか？

第3幕（時節は2月頃）

いよいよ最後の場面である。

ヴィオレッタの寝室。第2幕から2ヶ月が経ち、ヴィオレッタは肺の病気が進行して死の床についており、側にいるのは忠実な召使だけ。アルフレードは決闘で男爵を負傷させた後、錯乱状態に落ち込み、自らを冷ますために外国へ旅立っていった。ヴィオレッタはアルフレードとの仲を裂いた事を詫びたジェルモンの手紙を読み返していた。

この場面が、名曲アリア「さようなら、過ぎ去りし日々」が歌われる。ヴィオレッタには、もう諦めしかない。

ヴィオレッタのアリア「さようなら、過ぎ去った日々と美しく楽しい夢よ」

椿姫「さようなら、過ぎ去った日々よ」レナータ・テバルディ - YouTube

<p>SCENA IV Violetta, sola</p> <p>VIOLETTA Trae dal seno una lettera "Teneste la promessa... la disfida Ebbe luogo! il barone fu ferito, Però migliora Alfredo È in stranio suolo; il vostro sacrificio Io stesso gli ho svelato; Egli a voi tornerà pel suo perdono; Io pur verrò. Curatevi... meritate Un avvenir migliore. - Giorgio Germont". desolata È tardi! Si alza Attendo, attendo né a me giungon mai! . . . Si guarda allo specchio Oh, come son mutata! Ma il dottore a sperar pure m'esorta! Ah, con tal morbo ogni speranza è morta.</p> <p>Addio, del passato bei sogni ridenti, Le rose del volto già son pallenti; L'amore d'Alfredo pur esso mi manca,</p>	<p><第4場> (ヴィオレッター一人)</p> <p>【ヴィオレッタ】 (胸元から一通のジェルモンからの手紙を取り出す) 「貴女には約束を守っていただいた、決闘が行われました！男爵は負傷しましたが、回復に向かっています。アルフレードは国外におります。貴女の苦悩は彼に伝えました。 許しを求めに参るはずです。 私も参ります。お体をお大事に・・・ 貴女は幸せに値する。 ジョルジュ・ジェルモン」 (悲しげに) もう遅いわ！ (起きる) いくら待っても、ちっとも来てくれない！・・・ (鏡を見る) ああ、何て変わりよう！ お医者様は希望を持つと言うけど！ この病気のせいで、全ての希望は死んだのよ。</p> <p>さようなら、過去の楽しく美しい夢よ、 顔のバラも蒼ざめてしまった、 アルフレードの愛もない、</p>
--	---

<p>Conforto, sostegno dell'anima stanca Ah, della traviata sorridi al desio; A lei, deh, perdona; tu accoglila, o Dio, Or tutto finì. Le gioie, i dolori tra poco avran fine, La tomba ai mortali di tutto è confine! Non lagrima o fiore avrà la mia fossa, Non croce col nome che copra quest'ossa! Ah, della traviata sorridi al desio; A lei, deh, perdona; tu accoglila, o Dio. Or tutto finì!</p>	<p>それだけが慰めであり、支えだったのに、 ああ！道を誤った女の願いを聞いてください。 どうかお許しください、神よ、御許にお迎えください。 ああ、全て終わった。 喜びも悲しみも、もうすぐ終わりをむかえる、 お墓は、全ての者にとって終末なのです！ 私のお墓には、涙も花もないでしょう、 私の上には、名を刻んだ十字架もないでしょう！ ああ！道を誤った女の願いを聞いてください。 どうかお許しください、神よ、御許にお迎えください。 ああ、全て終わった。</p>

そこへ危篤を聞きつけたアルフレードが駆け込んで来た。二人は再会を喜び合った。再び二人で暮らす事を夢見る。(「**愛する人よ、パリを離れよう**」)しかしもはやヴィオレッタの身体は動かない。(ヴィオレッタの嘆き、「**こんなに若くして死ぬなんて**」が歌われる。)ジェルモンも到着し、ヴィオレッタに許しを乞うた。ヴィオレッタはアルフレードがつましく清らかな女性と出会って結婚するならば、ぜひ自分の絵姿を渡し、天上であなた方の幸せを祈っている者からだ、と伝えて欲しい、と言いつつ残す。(アリア「**もしもつましく清らかな**」)そしてヴィオレッタは息を引き取った。



はじめてのオペラは歌で選ぶ！「オペラ 後編」

| Suntory Hall Produce 音の宝石箱 | 健康食品・化粧品のサントリーウェルネスオンライン[公式通販]

(suntory-kenko.com)

<p>SCENA VI Violetta, Alfredo e Annina VIOLETTA Andando verso l'uscio Alfredo!</p>	<p>< 第 6 場 > (ヴィオレッタ、アルフレードとアンニーナ) 【ヴィオレッタ】 (扉に向かう) アルフレード！</p>
--	---

<p>Alfredo comparisce pallido per la commozione, ed ambedue, gettandosi le braccia al collo, esclamano:</p> <p>VIOLETTA Amato Alfredo!</p> <p>ALFREDO Mia Violetta! Colpevol sono... so tutto, o cara.</p> <p>VIOLETTA Io so che alfine reso mi sei!</p> <p>ALFREDO Da questo palpito s'io t'ami impara, Senza te esistere più non potrei.</p> <p>VIOLETTA Ah, s'anco in vita m'hai ritrovata, Credi che uccidere non può il dolor.</p> <p>ALFREDO Scorda l'affanno, donna adorata, A me perdona e al genitor.</p> <p>VIOLETTA Ch'io ti perdoni? la rea son io: Ma solo amore tal mi rendé.</p> <p>A DUE: Null'uomo o demone, angelo mio, Mai più staccarti potrà da me. Parigi, o cara/o noi lasceremo, La vita uniti trascorreremo: De' corsi affanni compenso avrai, La mia/tua salute rifiorirà.</p>	<p>(アルフレードは興奮のあまり、顔面蒼白になって現れる。二人は抱きしめあいながら、叫ぶ)</p> <p>【ヴィオレッタ】 愛するアルフレード!</p> <p>【アルフレード】 僕のヴィオレッタ! 僕が悪かった、全て分かっている、愛する人よ。</p> <p>【ヴィオレッタ】 いつか来て下さると思っていたわ。</p> <p>【アルフレード】 この胸の鼓動で、僕の愛を分かってくれ、君なしでは生きていけない。</p> <p>【ヴィオレッタ】 命あるうちにお会い出来たのだから、苦悩では殺せないのだと、信じてください。</p> <p>【アルフレード】 愛する人よ、悲しみは忘れて、僕と父を許してほしい。</p> <p>【ヴィオレッタ】 許すですって? 悪いのは私です、でも、愛だけが私を変えてくれたの。</p> <p>【二人で】 もう誰も、悪魔であれ天使であれ、私たちを引き離せない。 愛する人よ、パリを離れよう、そして人生を共に過ごそう、これまでの苦しみは報われる、君の/私の健康も甦るだろう。</p>
--	---

<p>Sospiro e luce tu mi sarai, Tutto il futuro ne arriderà.</p> <p>VIOLETTA</p> <p>Ah, non più, a un tempio Alfredo, andiamo, Del tuo ritorno grazie rendiamo</p>	<p>あなたは私の命であり、光となる、 未来は私たちに微笑むだろう。</p> <p>【ヴィオレッタ】</p> <p>ああ、これ以上は駄目です、 アルフレード、教会へ行きましょう。 貴方が戻った御礼を言わなければ。</p>
---	--

[いとしい人よ、パリを離れて ヴェルディ作曲 歌劇『椿姫』より 歌唱 森麻季&韓蓬 - YouTube](#)

女の仁義

実際は、オペラよりもむごい。

事実に基づいた小説原本における臨終の場面は、次のとおり。

(from [椿姫 \(t-com.ne.jp\)](http://t-com.ne.jp))

やがてヴィオレッタ（マルグリット；小説の椿姫の名）はパリへ帰ったが、心身の激しい消耗により病状はどんどんと悪化し、ついに死の床に伏せるようになった。咲き誇るようだった美貌もすっかり衰え、男たちの熱い視線と嫉視の中心にいて一、二を争う高級娼婦であった面影はもはやどこにも見られなくなっていた。パトロンにも見捨てられ、ヴィオレッタを利用して利益をあげていたポン引きのような女も寄り付かなくなって、世間からは全く忘れられた存在となっていた。そして派手な生活をしたツケとして、債権者が家に上がり込み、死後の競売の準備として、持ち物を一つ残らず差し押さえられた。

そんなヴィオレッタの心の中はアルフレード（アルマン；小説における彼の名）への愛でいっぱいだった。今は傷つき、自分を恨んでいるだろうが、やがて真実を知れば、きっと感謝し、いつまでも愛してくれるに違いない。そう思う事がヴィオレッタの心の支えのすべてだった。彼女はいつかアルフレードが真相を知るように、事の顛末を手記に書き記した。

『お父様はあなたがパリに行っている間に、私に会いにいらっしゃいました。最初はいかがわしい女相手だと思って高飛車な態度で息子と別れるように、とおっしゃったのですが、私が過去とは一切縁を切り、心からあなたを愛している事を申し上げますと、あなたにお願いがある、と私に頭をお下げになりました。そしておっしゃったのです。

「…たとえあなたが生業とは縁を切り、気高い心をもって息子を愛しておられても、一度道を踏み外した女を世間は決して許してはくれない。今は息子もあなたに夢中になっているが、長い年月が経ったらどんな情熱でも冷めてしまう。そしてあなたと一緒にあった事で世間からはじかれ、出世の道も閉ざされてしまった時、息子はあなたと一緒にあった事を後悔し、あなたを疎ましく思う事だろう。本当に息子を愛しておられるなら、今のうちに別れて息子の将来を守ってやって欲しい…。」

お父様のお言葉は私が内心抱えていた不安を思い出させ、現実に戻らせた。

私は残された唯一の希望である愛の生活をあきらめ、あなたの将来のために身を退く決心をしました。

何時の日か真実を知ったあなたにいつまでも愛される事を私は選んだのです。

そして一人パリへ帰り、心ならずもN伯爵の囲い者になり、高級娼婦稼業に舞い戻りました。ただ離れて行くだけでは、あなたがどこまでも私を追いかけていらっしゃる事がわかっていたからです。そして哀しみを忘れるために、より一層派手で放埒な生活にのめり込んで行ったのです。あなたの攻撃を受けて、私は苦しみながらも耐えていましたが、ついには追い詰められ、パリから逃げ出しました。そして帰って来た時はもうあなたは旅立っておしまいになっていたのです。

それからは私の身体はどんどんと悪くなって行き、もう命もそう長くはもたないでしょう。すでに世間からは忘れ去られ、相手にしてくれる方とてありません。一目あなたにお会いできれば、どんなに幸せな事でしょう。』

この手記を書き終えたヴィオレッタは日に日に弱って行き、話す事も身動きする事すらできなくなったが、扉が開く度にアルフレードかもしれないと思うらしく、目に輝きが浮かんだ。アルフレードさえ帰ってくればまた元のように元気になり、二人で幸せに暮らせるとでも信じているかのようであった。そして病で痛ましく苦しい日々を孤独に過ごし、いよいよ最期の時が近づいたヴィオレッタは、うわ言で数回アルフレードの名を呼んだ後、息絶えた。

エピローグ

ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは、
かつ消えかつ結びて、久しくとどまりたるためしなし。世の中にある人とすみかと、
またかくのごとし。

この名文は、鴨長明によって書かれた随筆『方丈記』の出だしである。私が二十代の時に出会った。日本が誇る屈指の文学作品ではあるが、いかんせん私は若すぎた。平安末期、鎌倉幕府が始まった直後の1212年、長明58歳の作である。いま70歳を超えた私にとって、ようやくその方丈（四畳半一間）のあばら家に終の棲家をむすんだ長明の侘びと彼の人生の儚さが解ってきたようである。さらには、日本文学史に垂名の名文をすらすらと書き上げた芸力と芸格の高さには頭が下がる。本人の意識にはないのだろうが、見事に写實的でもある。一切の挿絵がないのに、写真が貼り付けられているように感じられる。

私と椿姫と長明の生涯に共通点は余りない。今の私にとっては、洛外のあばら家に隠遁した長明に通じるものが大いにあることだ。現役の社会からはじかれてうらびれた引退生活をおくりながらも、己が前半生にたしなんだ歌人としての創作に最後の貢献を残した長明に感じ入った次第である。そのことが、椿姫の最後に同情どころか、男女の枠を超えて深く共感させる方向に働いた。彼女は消えそうな余命において、優しく労わるように惚れてくれたアルフレードに最後の想いとしての仁義を果たしたことが、私の心魂において哀しく光っている。それがクラシック巡礼への連鎖反応エネルギーとして充満し、この巡礼シリーズ初期の頃のように再び燃焼し始めてきた。

実は、この『椿姫』の巡礼ほど、腰の引けたみすぼらしい私をみたのは初めてであった。だから自身で追い詰め、逆に、その自分に追い詰められて何とか形どることができたもどかしさのみともない限り。世のコロナ禍という惨状もあった。己の体内にできた癌がみつかって、本物の恐怖も味わった。そんな状況でも、『椿姫』は許してくれない。そうなのだ。死神に追い詰められて昇天した彼女の淋しさに比べたら、私は甘すぎる。と断じて、やっと決意した。きっちり巡礼しよう。

鴨長明の名文によって、年をとっても、それなりに私の元気は出た。つまり、クラシック音楽に耽溺した己の前半生をめぐる心根の表出でもあり、こうして、『椿姫』の巡礼を結ぶことができた。おかげで、確かな自信をとりもどせたのである。

次はトスカになる。ヴィオレッタとは真逆の別嬪ではあるが、なぜか、胸が騒ぐ。

FIN